
ゼイファーマン

スグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼイファーマン

【Nコード】

N3861B

【作者名】

スグル

【あらすじ】

とあることで、ゼイファーマンになった不良少年・名塚翔助の何気ない数日間。

第1話「俺が一番、セクシー」

.....

S県在住の名塚翔助は、どこにでもいる不良少年。

昔のマ○ジンに多い典型的なツツパリだ。

喧嘩はするわ、タバコは吸うわ、盗んだバイクに乗るわ、ガラスは割るわ、ハードラックとダンスはするわ、わざわざ湘南へ行くわ、髪型は今は流行らないリーゼントにしたりと、不良街道真っ盛り。

しかし、そんな彼の不良街道に終焉が来たのは進路相談にて…。

.....

放課後の教室にて、担任の教師と、机同士向かい合って進路相談をやっていた。

成績と登校日数の少ない翔助本人は、希望の就職先はなく、ただ適当な仕事に就ければいいと思っている。

そして、担任の体育系教師が静かに進路について語りはじめた。

「貴様、こんなんじゃ就職出来ると思ってたんのか？」

教師は、呆れ気味で言う。

「適当な求人あつとこで、夜露死苦…」

明らかな私語を、翔助は言った。

「お前はな、出席日数、成績は足りない！しかも、童貞だ！！例えようがないほどのダメーシマンだ！！例えると、低脂肪製品の食べ過ぎ並に駄目だわ！！！」

そう言われ、翔助は担任の胸ぐらを乱暴に掴んだ。

「うるせえええー！！！！童貞が、てめーに迷惑かけたかボケ！！童貞が、てめーのハートに傷つけたか！？コラ！！！！？」

翔助は、キレた。

机を投げたり、椅子を投げたり、何故か、教室にあったロードローラーを投げたりした。

教室は、メチャクチャだ。

まさに、ガラスの心を持つ少年だった。

このことがキツカケで、彼は卒業を前にして退学。

そして、ここから彼の奇妙な冒険が始まった。

ちなみに、担任の教師も童貞だ。

.....

学校から飛び出した翔助は、町中を歩いていた。

さすがの彼も、退学には参った。

「あー、さすがに退学はマズイな。家からは出されるし、金はないし、泊まるそこはなんとかするとして、問題は金だよな。金を稼がないと。とりあえず、アルバイト探さないといけないかなー」

町中を歩きながら、不自然な独り言を彼は言う。

すると、ふと見上げた電柱に貼り紙があることに彼は気付く。

その貼り紙に書かれた文を読んでみた。

『アルバイト募集中！君の若さと情熱を無駄遣いしてみないかい！時給千円より。誰でもいいから、募集中！』

うほ...、いいバイトの広告...

翔助は、そう思った。

なんという都合の良い展開だろうか。

迷わず、彼は貼り紙に書かれた住所の元へ駆け出す。
徒歩で。

.....

翔助は、そのバイト先に到着した。

かなりボロボロの2階建てのビル。

そこに、『なんでもやります！ ヨウロピア』と書かれた看板があった。

ビルの前に立ち、翔助は息を呑む。

果たして、仕事内容も解らないバイトの面接に彼は受かるのか！？

翔助は迷わず、ビルの中へと入って行った。

すると…。

（裏切りと愛の末に待ち受ける感動ラストシーンが含まれますので、カットさせて頂きます）

「合格だ」

額から血を流しながら、悪っぽい容姿をした、いい男の店長は言う。机、椅子すらない個室の面接会場は、翔助、店長の阿部義和の血を浴びて真っ赤に染め上げられた。

こうして、翔助は、腱鞘炎になりながらも合格。

翔助と激しい戦いを繰り広げた店長は、血まみれになりながら仕事の内容を説明し始める。

「いいか、ホイホイ、バイトして…。この店は、お客様から電話で頼まれた仕事を、殺人以外で何でも実行する『なんでも屋』だ。全国で、20店舗」

「微妙に店舗多いな…」

翔助のアルバイト先、『ヨウロピア』は、なんでも屋だった。

お客様から来た、いろんな頼み事を電話で受付け、実行し収入を得る。

「このお店に、店員が私しか居なくなつたので、ちょうどいい時に君は来たよ」

そう店長は、血まみれの笑みで言う。

よく20店舗も広げられたな、と翔助は思った。

「よし、男は度胸つてモンだ。まず、服を脱ごうか…」

店長は、脈絡もないことを言い出した。

思わず、翔助は殴った。

返り血が、彼の顔を染め上げる。

.....

というわけで、テレビと電話だけある個室の椅子に翔助は座り、依頼の電話が来るのを待つこととなった。

翔助は、暇つぶしにTVを眺めていた。

正直、仕事内容をよく理解してない。

店長はホモだし、普通のバイトではない。

しかし、黙って電話来るのを待つだけで、自給千円は良すぎて反吐が出る。

「これなら、一ヶ月で新しい単車を買えるぜ」

そう、翔助は思った。

だが…。

ジリリリリー！！

早速、机の上の電話が来てしまった。

楽なバイトだと思った矢先にだ。

「はいよ、もしもしー」

仕方なく、翔助は電話に出た。

「助けてくださいー！！」

受話器から女性の声が響いた。

その声は、あまり悲痛な声だ。

翔助は、受話器を片手に驚く。

「どうしたー！！」

「お願いしますー！！助けてくださいー！！！！息子が……！！」

女性は、とても必死な様子だ。

「落ち着け！子供が、誰かに襲われてるのか……！！」

翔助が、そう聞き返すと…。

「息子が、銀行強盗しにきた宇宙からの侵略者に人質にされてるん

です！！！」

ガチャツ…。

受話器を翔助は置いた。

どう考えも、いたずら電話にしか聞こえない。

「なんだよ、このイタ電…。今時、宇宙人なんか居るかよ…」
そう言いつつ、ふとTVに目が行くと…。

「大変です！！たった今、謎の安月給宇宙人こと『ヤスギュー星人』
が、0083銀行に子供を人質に立て籠もっています！！！！」
そう必死に、TVのリポーターが訴えていた。

生放送で。

翔助の目が、点になった。

電話の内容は、本当だったのだ。

「ヤスギュー星人の要求は、15万だそうです！！このままでは、
人質の無事は保障されません！！！」

更に、TVリポーターが言う。

「保障されるよ！！15万くらい渡せ！！上京して金使いすぎた
奴が、親から借りるレベルの金額だろ！！」

思わず、翔助はTVにツッコむ。

しかし、頭より体で考える彼は、部屋から走り出す。

いつも思っていたことがあった。

『なんで、大人になると、誰かが傷ついても無視してしまうんだろ
う』

不良だが、彼はそう考えた時期がある。

宇宙人に捕らえられている子供は、知らない子だが助けなければなら
ない。

そう彼は、感じた。

だから、銀行へと向かう。

ビルの前に停めていた愛車のバイク、ゼファー400に翔助は乗り、

彼は銀行へと向かう。

バイクはビルから飛び出し、道路へと。
徐々に、バイクのスピードは速くなる。

「早く行かないと…！」

アクセルを握る力が、より強くなる。

道路の景色を飛ばし、ようやく銀行を目の前にして大きなカーブが見えた。

その時、彼は気づいた。

（ブレーキが効かない…！）

ブレーキを握っても、バイクは減速しない。
思わず、前輪を見てみると、翔助は驚いた。
バイクのブレーキホースが、切れている…。
ホースから、オイルが垂れる。

これでは、バイクが減速出来ない。

更には、曲がり切れない…。

彼がそう思った瞬間…。

目の前に、カーブ壁が目の前に迫った。

だが、減速出来ずにハンドルも上手く切れない。
そして…。

ドガッ！！

翔助とバイクは曲がり切れず、カーブ壁に激突。

衝撃で、バイクは粉々。

部品がバラバラと、飛び散る。

激突の衝撃で、バイクから離れた翔助の体が宙を舞う。
宙に舞いながら、翔助は思った。

（まさか、一話でもう死ぬの…）

彼は、宙に舞いながら死を覚悟した。

だが、このあと、彼に驚愕事態が起きる。

.....

第2話「意外に、早いんだな」

.....

「……！」

バイクの激突で、宙に舞った翔助。

このまま、彼の体はアスファルトへと落ちて行く。
そう思われた時……。

ピカッ！！

強烈な白い光が、光った。

その光は、翔助の体を中心にして放たれている。
そして、そのまま翔助の体を光が包んでいく。

.....

翔助は、目の前が真っ白になった。

それは、もう自分は死ぬんだなと思わせた。

だが、薄れ行く意識の中、頭の中に音が響く。

（名塚翔助……、だな……）

誰かの声だ。

ついには、幻聴まで聞こえるまでに来たかと、翔助は思った。

やけくそ気味に、翔助は薄れ行く意識の中で声を出す。

「誰の声だ……。まさか、M7。星雲から来た超人とか言うんじゃないよな……」

どこかで見たような状況に、翔助はそう言う。
すると、また誰かの声が聞こえる。

（そうだ）

「嘘!!」

（ごめん、今の嘘）

「ふざけんな!!!俺は、もうすぐ死ぬって言うのに」

（いや、死なせはしない）

「なっ!!」

誰かの天声は、死なせはしなかった。

（私は、解雇星の子会社にリストラされて、地球へ銀行強盗しに行ったヤスギュー星人を追って地球に来た『宇宙の平和を考える友の会』の会員のマッスル星人だ）

「カッコ悪い上に、ウル。ラマンのパクリじゃねえか!!」

（まあ、話はよく聞け。ヤスギュー星人を追って、地球の来たのは良かったが…。私は、自分のエネルギー源であるプロテインを、地球に持つてくるのを忘れてしまったのだ。だから、プロテインなしでエネルギー消費の激しい地球で活動するのは不可能というわけ。ちなみに、地球のプロテインは口に合わないので飲まない。だが、私は、地球人の体に取り憑くことが出来る。だから、取り憑いた人間からエネルギーを取り、プロテインなしでも地球上で生きていくる）

「自分の生死を、口に合う合わないで左右するのか…」

ちなみに、翔助は、自分が死にそうなのを忘れている。

（ちょうど、プロテインを忘れたのに気づいて困ってた時、君が事故ったんで、君の体に乗っ取ることにした）

いきなり、突拍子のないことを言い出した。

「ええー!!!」

さすが、翔助は驚く。

（まあ、さすがに乗っ取るのは『宇宙の平和を考える友の会』としてはマズイので、君の意識は支配しないし、君に僕の力を貸すから、君の体に取り憑かせてくれ）

律儀に、マッスル星人は言う。

「そうすれば、死なないんだ俺は…」

（もちろんだ）

「なら、よし」

そう言っていると、急に薄れ行く意識が戻っていく感覚を得た。

すると、目の前の白い光が消えて行き、太陽の光が目差し込む。

（金銭関係など以外で本気で困った時、死にそうな時になったら、心の底で私を呼んでくれ。もう私は、君の一部だ。ただ、ヒーロー物のお約束で、他の人に正体をバレない様にしてくれ。このことは、誰にも話すなよ）

その言葉を、最後にもう天声は聞こえなくなった。

.....

「いでえ！！！」

翔助は目を開けた。

同時に、激痛が体に走った。

だが、血はどこからも流れてはいない。

ただ、痛いだけ。

そして、周囲を見渡すと、バラバラに砕けた自分のバイクが。

「あれっ……」

壁を見ると、すざましい激突跡が残っている。

加速したバイクで、思いっきり激突したのに、翔助は無傷。

人通りが少ない場所なので、誰も回りには居ない。

そして、さっき自分が意識を失いそうな時に聞こえた言葉を思い出す。

（君に僕の力を貸すから、君の体に取り憑かせてくれ）

（困ったとき、死にそうになったら、心の底で私を呼んでくれ）

あれは、夢じゃなかったのか…。

「あっ！！！」

同時に、自分がすべきことを思い出した。

銀行強盗の宇宙人に、捕まっている子供を助けなければならないの

だ。

そのことを思い出し、翔助は走り出す。

「あの子供を助けないと！！」

そして、彼は銀行まで駆ける。

助けてやらなきゃなんねえ！！

その思い一心で、翔助は走る。

行っても駄目かもしれない。

だけど、なにもしないのが出来ない彼の血が全身に駆け巡る。

「ぜってえ、助けてやるからな！！！」

その思いが、奇跡を起こした。

急に、彼の体が光り出す。

同時に、今まで感じた事ないパワーが彼の体に駆け巡る。
すると…。

カッ！！

大きな光が、全身から放たれた。

その光の力が、彼の肉体を異形の姿へと変身させた。

強靱な筋肉で作られた四肢とボディ。

その体は、漆黒の甲冑に包まれている。

そして、この世の生物は思えない凶暴に見える顔。

まさに、その姿こそ、翔助に取り憑いたマッスル星人が生み出した
力。

翔助の鋼の精神に見合う肉体を持った、ニューヒーローの誕生だった。

この力なら、ヤスギュー星人に勝てる！！

………

ピーポー、ピーポー

「…」

ニューヒーローとなった翔助は、銀行に着いた。到着したのは、良かった。

だが、彼は啞然と口を開ける。

何故なら、ヤスギュー星人が手錠をかけられ、パトカーに乗っていたのだ。

どうやら、世界に誇る日本の警察は、ヤスギュー星人を逮捕に成功。子供も無事だ。

その事件解決後の光景に、翔助は呆然と立ち尽くす。

ニューヒーローになれたが、来るのが明らかに遅かった。

「バイク壊してまで来た、俺の立場は…」

思わず、そう呟く。

すると、一人の警官が近づいてきた。

「君見かけない宇宙人だけど、誰だ？」

そう聞かれた。

「えーと…、ヤスギュー星人を倒しに来た者です…」

正直に答えた。

「そうかい。でも、遅かったねー」

「最近の警察は、凄いですね…」

警官が誇らしげにしてる様子が、何故か、気に触る翔助。

「君の名前は…？」

そう言われ…。

「（マッスル星人なんて、死んでもいえない…。さっき、ゼファー壊しちゃったし…）特攻戦士、ゼイファーマンです…」

即興で作った名前を言うことしか、今の彼には出来ない。

このあと、普通に変身を解除して、バイト先に戻った。

ちなみに説明が遅れたが、この作品での宇宙人は、地球人サイズだ。

.....

第3話「男は度胸ってモンだ」

.....

いろんな事情が重なり、不良少年で、ピアノで『戦場のメリークリスマス』が弾ける名塚翔助は、正義のヒーロー『ゼイファーマン』に変身出来るようになった。

しかし、本日まで、バイクは破壊されるわ、初めての变身が無駄に終わるわ、バイト先の店長はホモだわと悩みは尽きる事はない。

.....

そんな彼は、バイト先のビルの個室に寄生虫のように住み込んでいる。

今日も、他人のいろんな依頼の電話を待たねばならない。

しかし、電話が来るまで、実に暇なので、現在の彼はTVを眺めているだけだ。

「あー、暇だー。暇すぎて反吐が出るぜ」
そう呟いた。

だけど、依頼が来たら面倒なので、電話はならなきゃいいとも思っている。

まさに、二ートの発想だ。

ジリリリリーー！！

早速、机の上の電話が来てしまった。

翔助は机にある受話器を握った。

「あいよ、もしもし…」

めんどくさいが、仕方なく電話に出る。

「もしもし、なんでも屋のヨウロピアさんですか…？」

受話器から、麗しい女性の声が。

その声で、翔助の鼻の穴が開いた。

.....

それから、数分後の夕方の駅。

駅の前に、翔助はポツンと立つ。

ここに居るのは、さっきの依頼者との待ち合わせ場所であるからだ。「えーと、さっきの電話の麗しき女性からの依頼はについて確認するか。先日、大学の帰り道、背後から足音が聞こえ、振り返ってみると電柱に隠れた人影が見えた。それ以来、ずっと帰り道を一人で歩くと、自分以外の足音が聞こえ、無言電話も頻繁に来て、アパートに居ても、窓から誰かの視線を感じる。こりゃ、どう見てもストーカーだな」

と、駅前で独り言をしていると...

「あの、すいません。ヨウロピアの名塚さんでしょうか...?」

その声に、あまり女性に名前を呼ばれたことのない翔助は、すぐ反応した。

振り向いた先には、小柄でお洒落な服装をした茶髪の短髪で、おとなしい感じの眼鏡の女子大生が。

「はい！わてが、男塾生、名塚翔助でぼんす！趣味は、読書です！エッチな本は読んだことないです！夜露死苦お願いします！！」
とっさに思いついた自己紹介文を、依頼者の彼女に言う。

「えっ、よろしくお願いします...」

少し引き気味に、彼女も返事を返す。

ちなみに、翔助の財布には、とある準備が仕込まれているのに、彼女は気づいていない。

.....

彼女の名は、春野カイリ。

女子大に通う、ごく普通の19歳。

実家の東北地方の田舎から来て、S県某市のアパート2階に住んでいる。

現在、奇怪なストーカーに悩まされているため、毎日恐怖に襲われている。

翔助への依頼は、彼女の背後に潜む影から守ること。

そのことを、翔助は彼女と共に、喫茶店『ドコドスコイ』で、お茶をしながら確認していた。

椅子に腰掛け、ブラックコーヒー（にミルク、砂糖を多めに入れ、マックスコーヒー状態にした物）を口にしながら、翔助はメモを取って話をしている。

「なるほど…。それで、スリーサイズは？上から、言っててね」

「…」

脈絡のない質問に、彼女は戸惑う。

「あの…、名塚さんは、失礼ですが、ヤンキーですか…？」

翔助の容姿から、そう言うしかなかった。

「いいえ、私は、ヤンキーではありません」

（嘘だ…）

英文の回答のような返事は、翔助はした。

彼女は心から、翔助が信用できない。

何故なら、彼女はヤンキーが嫌いだった。

どれくらい嫌いかというと、小学校の卒業文集に書いた『こういう人とは、結婚したくないランキング』という作文のランキングにて、1位が『ヤンキー』だったからだ。

さらには、2位が『コーヒーに、必要以上に砂糖、ミルク入れる人』。

3位は『ドスケベな人』。

すべて、翔助に当てはまる。

「よし！このワタクシ、高校中退ヤンキー、名塚翔助に任せなさい

！

（今、ヤンキーって名乗った！）
こうして、翔助のボディガードが始まった。

しかし、二人は気付いてはいない。

喫茶店の外には、長いコートと深く帽子を被った怪しい男が居るのに…。

その怪しい男は、窓にへバリつくように、あの二人の様子を覗いている。

（あいつ、怪しい…）

（今時、あんな怪しいカッコして、窓にへバリつかねえよ…）
通り過ぎる人々、みな、その様子を見て思った。

……………

時刻は、夕方。

陽は沈んだ。

彼女は、いつもの壁に囲まれた細い小道の帰り道を、隣に翔助をつけて歩く。

だから、不安はないのだが、さつきから…。

「ねえ、カイリさん！。腕組んだ方が、カップルぽく見えて、ストーカーの野郎が、諦めて去ってくんじゃないっすかー？腕組みましようよー。あと、携帯のアドレス教えてくださいよー」

さつきから、携帯を片手に掲げ、ボディタッチを迫る翔助に悩まされていた。

「あの、名塚さん…。やる気ありますか？」

彼女は、そう聞いた。

「ありますよ！（夜の方の）」

「だったら、ストーカーが付けてないか、確認して下さいよ…」
そう言う…。

翔助は、急に口元に笑みを浮かべ、静かに口を開いた。

「ストーカー野郎は、さつきから後ろに居ます…」

と、とても小さな声で彼女に言う。

「えっ!?!」

彼女は驚いた。

すると、翔助は携帯電話の画面を彼女に見せる。

携帯の画面には、長いコートと深く帽子を被った男が電柱の影に潜む画像が。

「俺の携帯は、内側カメラ（ディスプレイ側）が内蔵されてて、さつきから携帯をいじってるフリしながら、背後に居る野郎の姿が出てくるのを、カメラから見てたんですよ…」

なにもしてないようだったが、携帯の内側カメラから背後の様子を写しながら、写真を撮ったのだ。

これには、彼女は素直に驚いた。

「あなた、しっかりしてるわね…」

「じゃあ、お礼に、腕組もうよー」

冗談ながらに、言う。

「だけど、どうすんの…？今まで、ずっと尾けられてたなんて…」

やはり、今までストーカーキングされていたことが解ったが、彼女はストーカーに怯え始めた。

その彼女の様子に、翔助の怒りが湧いた。

「もう証拠も掴んだし、あいつを捕まえて、警察に送れば事件解決

…」

そう言いながら、翔助は振り返る。

そして…。

「おい！ストーカー野郎！もう姿、押さえてんだよ！！出てこいや
！！」

大声で、振り返った先にある電柱に向け叫ぶ。
すると…、展開の都合の関係上か…。

「ふふふ…、バレてしまったか…」

電柱の影から、声がした。

そして、長いコートと深く帽子を被った男が電柱から出てきた。

「てめえー！！ストーカーなんぞ、しやがつて！！」

姿を現したストーカーに向かって、翔助は拳を振り上げ、殴りかかって行く。

すると、男は長いコートを脱いだ。

「！？」

その男の姿に、彼女は驚く。

「ふふふ…」

なんと、男は全身虫のような皮膚と顔をした宇宙人だったのだ。

「えっ？」

驚いた翔助の足が、止まった。

宇宙人は、長い腕で翔助の首を掴んだ。

喉から、潰れるような低い声が出た。

宇宙人は、そのまま腕の上に動かし、翔助の体を軽々と浮かせる。

そして、そのまま…。

ブン！！

宇宙人は、小道の道の向こう側へ目掛け、翔助の体を投げた。

勢い良く、翔助の体はボールのように飛ぶ。

「ああああー！！！！！！！！」

投げられた翔助は、宙を吹っ飛んで行き、目の前の景色が流れて行く。

カイリの目の前から、一瞬にして飛ばされた。

そのことに、驚いた彼女は叫ぶ。

「名塚君！！」

やっと信用出来た翔助が、一瞬で飛ばされ恐怖した。

彼女の足が、ガクガクと震えている。

そして、力尽きたように腰から地面にへたり込む。

（足が動かない…）

「ふっ…」

まるで、ゴミでも捨て終えたような雰囲気で、宇宙人は、恐怖に慄く彼女の元へと歩み寄る。

彼女は逃げようにも、恐怖が強すぎて逃げられない。

「私は追尾星から来た、ビゴウイン…」

急に、名乗り始めた。

徐々に、彼女に歩み寄ってゆく。

「私は、気入った地球人の女性を観察する…。何故なら、それが趣味だから…。君は、その趣味の一人に過ぎないが…。まさか、正体を押さえられるとは…」

ビゴウインの言葉に、彼女は震える。

今まで、ずっと、気味の悪い宇宙人に尾行されていたという事に、彼女は言いようのない恐怖で包まれる。

かなりの絶望が、彼女を襲う。

「君は、私の趣味に、もう少しだけ付き合ってもらおうよ…」

蟻螂の様な甲殻の顔の口から、舌が現れ、ジュルリと音を出す。

「きゃあああああ！！！！！！」

カイリは、思いつきり叫んだ。

目から、大量の涙が。

ビゴウインは、その腕を彼女の体へと伸ばした…。

カッ！

上空から、陽の沈む紅の空から不自然な程の光が。

「！」

ビゴウインは、その不自然な光の方向に振り向いた。

「…」

振り向いたビゴウインは、驚く。

光の先には、見慣れない形相をした宇宙人が…。

「なんだ!？」

ビゴウインは、いきなり現れた宇宙人に動揺した。

宇宙人は、夕陽に重なるようにビゴウインの方へ飛び込んでくる。

「うおおおおおー!!!」

大きく叫びながら、夕陽に重なる宇宙人は拳を振り上げた。

その拳は、ビゴウインに向けられている。

そして、拳を振り上げる宇宙人こそ、先程、ぶん投げられ変身した名塚翔助の姿、ゼイファーマンだ。

.....

第4話「刃物、ダメ！絶対ダメ！」

今回、内容が薄いため、文字数稼ぎの前回までのあらすじ。

いろんな事情が重なり、不良少年で、『ウル。ラマンのカラータイマーには、黄色があると』思い込んでる名塚翔助は、正義のヒーロー『ゼイファーマン（マッスル星人）』に変身出来るようになった。しかし、本日まで、バイクは破壊されるわ、初めての変身が無駄に終わるわ、バイト先の店長はホモだわ、作者がバイクで転んで、リアルに怪我するわと悩みは尽きる事はない。

翔助はぶん投げられながらも、ゼイファーマンに変身。
そして、巨悪なストーカー星人・ビゴウインへの怒りに身を任せ、殴り掛かる。

果たして、パンチは炸裂するのか！！
しないのか！！
それとも、パンチと見せかけて、キックを放つのか！！

ゼイファーマン（翔助）は、夕陽に重なるようにビゴウインの方へ飛び込んでくる。

「うおおおおおー！！！！！！」
大きく叫びながら、ゼイファーマンは拳を振り上げた。
ビゴウインは、いきなり現れたゼイファーマンに動揺し身動きが取れない。

その拳は、ビゴウインの昆虫のような顔面の左頬に向かった。

バゴッ！！

握り拳が、ビゴウインの顔面に当たった。

「ぐぼっ！！」

蟻螂顔の口らしい部分から、緑色の液体が飛び散る。
どうやら、血のようだ。

ビゴウインは殴られた勢いで、壁に激突。

そのまま、壁に倒れこんだ。

ゼイファーマンは、その場に立ちそびえる。

拳には、血管が浮き上がっている。

このいきなりの登場に、カイリも驚く。

「誰…」

彼女は思わず、そう言う。

当然だが、正体が翔助だということは知らない。

何故なら、ヒーロー物の掟で正体が他人に知られてはならないという掟があるからだ。

だが、仮面。イダー、戦隊物は別に正体知られても問題ない。

口から、緑色を垂らしながら、ビゴウインは起き上がる。

「誰だ、貴様！！」

いきなり、殴られた怒りで叫んだ。

「てめーに名乗る名前はねえ！！」

ゼイファーマンは、そう言い返す。

何故、名乗らないのか…。

それは、変身したとはいえ、変身後の人格も翔助だからだ。

翔助の人格は、怒っている。

あのビゴウインは、一人の女性を、まるで虫を観察するがごとくに弄んでいた。

そして、彼女を怯えさせ、心を蝕ませた。

それは、許せないこと。

「あなた、誰なの！」

カイリが叫んだ。

「ゼイファーマンです」

だが、それ以外の者に名乗るが翔助だ！！

だけど、結果的に敵にも名乗っちゃったんだよな！！！！

すっ…

ビゴウインの甲虫のような右腕の肘から、刃が出てきた。
切れ味の鋭く、怪しく光を反射する。

「っ！」

ゼイファーマンは、それに気づき、ちよつと血の気が引く。
刃を輝かせ、ビゴウインはゼイファーマンへと歩み寄る。

「ゼイファーマンだか、なんだか、知らないが…、私の美しい顔に
傷をつけて、無事で済むと…」

「自分の顔を、鏡見てから言え。ホームセンターで、殺虫剤買って
くっか？」

ビゴウインの脅しを、ヤンキー独特の挑発で返した。
キッ！！と、ビゴウインの顔が歪む。

見事なまでに、挑発が効いた。
すると…。

サッ！

逆上したビゴウインは、すかさず刃を出した腕を差し出した。
ゼイファーマンを切り刻むがごとく速さ。

刃が、空気を切り裂く。

「！」

対応に遅れたゼイファーマンの首めがけ、刃が飛ぶ。

「ひっ！」

その凄惨な瞬間が起きようとする状況に、カイリは思わず目を閉じた。

同時に、この状況のどうしようもなさきに気を失った。

彼女の意識を切るような刃は、ゼイファーマンの首を捉えた…。

ガキッ！！

「！？」

ビゴウインは、驚いた。

自らの鋭い刃の勢いが、不自然な音を残して止まった。

「うつ…！」

狙った刃は、首ではなく、ゼイファーマンの歯と歯で噛まれていたのだ。

だから、勢いは止められ、首には届かない。

「こいつ！歯で止めやがつ…！！」

驚いたビゴウインの刃は、ゼイファーマンに噛まれ、ビキ！ビキ！と割れる音を出す。

歯でキャッチした刃を、噛み砕こうとしているのだ。

「てめえ！離せ！！ワニ猿が！！」

冷静な態度を崩して、ビゴウインは叫ぶ。

だが、もう遅かった。

バギッ！！

ゼイファーマンの歯が、刃を砕いた。

ガラス片のように砕け散る。

「びゃあああああー！！！！！！」

ビゴウインは、昆虫のような口を広げ叫ぶ。

その隙に…。

ブンッ！と大きく、ゼイファーマンは左腕を後ろに振り下げる。

「光モン出すよーな半端モンは、ムカつきすぎて反吐が出んだよ！
！」

そう一言を吐き、ゼイファーマンの太く強靱な筋肉に包まれた左腕は大きく空気を切り裂き、ビゴウインの顎へ飛ぶ。

ガゴツ！！

鈍く大きな音が、辺りに響いた。

なにかが、砕けて割れるような音だ。

ビゴウインは、顎を下から、殴られた口から緑色を吹き出しながら、空中へと舞う。

ゼイファーマンの顔に、緑色の液体が付いた。

たぶん、ビゴウインは、もう立ち上がれない。

警察に回収されるまでは…。

……………

春野カイリは、しばらく、なにがなんだか解らなかった。

目を開けると、彼女は病院のベッドに居た。

たぶん、ビゴウインは散った後に、警察が現われ、彼女を保護したのだろう。

目が覚めた後、そのまま病室のベッドで警察から事情を聞かされ、ビゴウインが捕まったことを聞かされた。

（ゼイファーマンとかいう宇宙人が、倒したのか…）

そう思った。

同時に、思い出したことがあった。

（翔助君！）

今回のことで、自分のために体を張ってくれた翔助のことが心配になった。

今まで、不良とか、ヤンキーが嫌いで仕方なかった彼女が、ビゴウ

インに吹っ飛ばされた翔助のことを気にした。

（無事なのかな…）

そう思い、彼女は病室の窓際を眺めた。

窓の外の木々は、未だに葉が咲いては居ない。

.....

一方、翔助は、彼女が居る病院の外でタバコを吸いながら歩いている。

病院には、怪我の治療と彼女の安否の確認のために来た。

彼女が無事だと解り、安心した翔助は彼女に逢わぬまま去る。

何故なら、もう彼女からの頼み事は終わったと思ったから。

「しかし、携帯の番号聞いときゃ良かった…」

タバコを吸いながら、冬の寒い空気の中を歩く。

まだまだ、春は遠い。

.....

第5話「血は噴水のように出ません。本当に、テレビの過大表現って嫌ですね」

.....

とある某日。

地球に、一つの光が向かっていった。

隕石のような鉱物ではない。

どこかの星から来た生命体が光を放って、移動している。

大気圏を越え、それは、地球に降りた。

そして、地球に降りたなにかの目には、一つの建物が。

『天声高校』

そう書かれた建物だ。

「.....」

なにかは、思考を働かせ、動き、どこかへと潜んだ。

果たして、そのなにかの狙いは？

.....

なんでも屋『ヨウロピア』のいい男の店長、阿部義和は困っていた。何故なら、雇ったとは言え、事務所に翔助が寄生虫のように住み着いていて迷惑してるからだ。

しかし、ダイエット効果がないことが解った納豆を見捨てる主婦のように、翔助を見捨てることは出来ない。

だから、店長は考えた。

すると、とある名案が浮かんだ。

事務所の椅子に座り込む翔助に、店長が一言言った。

「学校に行かないか？」

その言葉で、翔助は凍りつく。

.....

「今時、高校ぐらい卒業しないといけないし、ぶっちゃけ邪魔だからって、寮付きの高校へ行けと……」

さつき、店長に言われた言葉を、翔助は椅子に座りながら復唱する。彼は、その高校の場所が書かれた地図を眺める。

店長には、ハッテン場ではなく、飲み屋で知り合った高校の校長を務めている友人が居て、店長が彼に頼み、住所不定、学歴高校中退の翔助を引き取ってもらうことにしたのだ。

その高校には、寮があり、ちゃんとした食事もあるので、不規則な生活をする翔助の生活改善にもなる。

だから、翔助本人も嫌々ではない。
だが……。

「しかし、俺は今年で19なのに、なんで2年生からなんだよ……」

それは、ストーリー上、仕方ない。

「まあ、中退つてのも、いい響きじゃねえし……。学校にも行けて、ちゃんとしたところで暮らせる。いいことづくしで、反吐が出るぜ……」
と言い、翔助はこれからの新生活にワクワクしていた。

そして、新しい学校での期待も高まる。
性的な意味で。

.....

そして、転校初日……。

翔助の通う高校は、『私立天声高校』。

部活動が笑ってしまうほど盛んではなく、どちらかというと、頭のいい生徒が多いが勤勉な高校だ。

しかし、不良生徒も居たりするが、別にそんなに学校に迷惑掛けて

なかったりと、なにかと中途半端だ。

彼の受け入れ先である2年B組の教室は、賑やかだ。

それも、そのはず、転校生（翔助のこと）が来るから。

だから、ホームルーム前であっても、席に着かないで生徒達は騒ぐ。

「どんな奴だろうな」

ありきたりなことを言うのは、クラスに一人は居るよく騒ぐ奴の鳥と
りだともたろう

田智太郎。繋げると、鳥だと思っただろう。

彼を中心に騒ぐクラスメートたちに呆れている少女が居た。

「転校生が来るからって、騒がない!!」

クラス委員である彼女が、そう叫んだ。

ポニーテールの髪型の活発的な彼女の名前は、夏木風奈。なつき かせな

明るく、マジメで、どこか小悪魔的なルックスで定評のある少女。

「いいじゃんかよ」

鳥田は、そう言い返す。

そんな彼の一言に、彼女は腹を立てた。

「よくないわよ!!」

生徒会アンケートで、『もっとも、うるさいクラスランキング』で一位を取ったクラスなので、風奈にはよく思えない。

彼女と同じように、もう一人のクラス委員の碓氷影臥うすい かげがも注意するが、誰にも気付かれてはいない。

理由は、言わなくても解ると思う。

ガラッ!

教室のドアが開き、担任の教師である阿部高和（店長と名前が似てるが、兄弟でもなんでもない）ので、気にしないで下さい）が来た。

その瞬間に、クラス全員が静まり返る。

「おはよう」

挨拶しながら、教壇に立つ。

そして、このまま、ホームルームが始まった。

「今日は、転校生が来る。みんな、仲良くするんだぜ」

教師は、そう言う。

「もっちゃんですー!!」

「わははは!!!」

鳥田の調子のいい一言に、クラス全員が沸く。

「うれしいこと、言ってくれるじゃないか。じゃあ、名塚君、入ってきたまえ」

教師は、廊下で待つ翔助に入ってくるように指示した。

「はい…」

返事と共に、ドアが開く。
すると…。

!?

ドアが開いた瞬間。クラス全員が、沈黙した。
何故なら…。

教室に入ってきた翔助は、ホラー映画ばりに血まみれだった…。

頭から、噴水のように血が飛び、歩くたびに、床に血が垂れ落ちる。
鼻、唇から滝のように、タラタラと血が流れ、ブレザーの制服は裂け、自慢のリーゼントも崩れている。

「ひいひいひいー!!!」

全員が、つのだ先生の漫画のような表情をした。

「どうしたい？」

教師は、何故か、すごい冷静に対応する。

というか、教室に連れてきたのは、教師のはずだが、そこは気にしない。

血まみれの翔助は、口を開いた。

「階段で、転びました…」

もちろん、嘘だ。

.....

あれは、数分前の翔助の登校中の出来事だ。

ゼファー400が、前回大破したので、代わりの原付に乗り、木々の多い細い小道を走っていた。

すると、どこから、ともなく小道の木の影から、飛び出し星からやってきた、走ってる自動車の前に飛び出す宇宙人のコケイルが、翔助の前に飛び出してきた。

「ぎゃああああー！！」

驚いた翔助は、急ブレーキしたが、前輪がロックし、原付から振り落とされ、そのまま小道の脇にある崖に落ちていった！（飛び出しは、マジでやめましょう。飛び出した人が悪くても、加害者になるのは運転手です）

崖から落下して、血まみれになった翔助は、ゼイファーマンに変身！

カッ！

崖をよじ登り、コケイルの首をゼイファーマンは掴んだ。

そして、顔をコケイルに近づけた。

「飛び出すな！ボケ！！怪我しても、バイク大破しても、俺が悪いことになんやぞ！！わかつとんのか！？ああー、コラ！？悪意での飛び出しは、痴漢冤罪と同等の被害者が加害者になる行為なんやぞ！仮に、車止まらんかったら、お前も怪我すんだぞ！嫌やろ？馬鹿！！」

と、半ば作者の本音みたいなことを言いながら、ゼイファーマンは、コケイルをバコス力殴り飛ばした。

コケイルは、複雑骨折した。

歩道を渡るときは、ちゃんと右、左確認しよう！

.....

そんな目に、翔助は遭った。

だから、登場して間もなく、保健室に運ばれた。

そして、騒がしいことで有名な生徒達が、初めて黙り込んだ。
クラス委員、風奈はこう思った。

（クラス全員、黙らせるなんて…）

一度も、黙らせたことのない彼女にはショッキングな出来事だった。

「さあ、そろそろ、授業をやらないか？」

何事もなかったように、阿部高和教師は授業を始めた。

.....

「.....」

そして、宇宙から降ってきたなにかは、学園のどこかで静かに時を待つ…。

.....

第6話「すいません。今回は、変身できませんでした」

.....

「いでで！優しくやれや！」

ズポンを捲った翔助の膝に、消毒液がかかる。

新しい学校での初日、翔助は保健室で過ごすはめに。

同じクラスの保健委員の秋野^{あきの}葉月^{はづき}から、ベッドに座りながら、絆創膏などを貼って貰っていた。

手当てをする彼女は、面倒見のいい感じの活発な感じの女の子。

「あなた、ヤンキーなの？そのリーゼント自毛？」

と、翔助の小指に包帯を巻きながら、興味津々に彼女は聞く。

異性との面識が少ない翔助だが、どうやら、秋野みたいな積極的な女の子は射程外のように。

そのため、しぶしぶと答える。

「見りゃ、解るじゃねえか…。自毛だ…」

「はい、終わり！」

と、彼女は包帯を巻き終わった翔助の小指を叩いた。

「いでえええええー！！！！！！！！！！」

打撲した小指に激痛が走る翔助は叫んだ。

「ヤンキーなんだから、これぐらい我慢しなさいよ」

と、秋野は言う。

これには、翔助の額に血管が浮き上がる。

（こいつ…、そのうち…、犯したる…）

痛む小指を握りながら、翔助は彼女を睨む。

手当てをし終わった彼女は、立ち上がった。

どうやら、授業に戻るようだ。

「じゃあ、安静に寝てなさいよ。ここで、タバコ吸ったら、先生に言い付けるからー」

と、忠告しながら、彼女は保健室から出ていく。

翔助は、苦い顔でベッドに倒れこんだ。

「なんだ、あのアマ……」

生意気だなーと思うしか、なかった。

………

昼休みの屋上には、この学園の数少ない不良たちが、たむろっていた。

そして、いつものように、タバコをくわえながら喋っている。

不良たちのリーダー格である、長身の多摩^{たま}巨^{きよ}人^{ひと}が、屋上から校庭を眺めていると……。

「んー」

見慣れない茶髪のリーゼントが、校庭の駐輪場に居るのに気付いた。

………

駐輪場に居るのは、保健室から抜け出してきた翔助。

なにかと、落ち着いてられない性分。

そして、生徒達が使う駐輪場にあったバイクを眺めていた。

「へえー、ホンダのCBナナハン（排気量750）……。最近のカラーリングは、CBXに似てんな……」

と、CB750のエンジン周りを見ている。

すると、カワサキ派の翔助だが、そのCB750に乗ってみたい欲に駆られた。

チラチラ背後を気にしながら、制服のポケットから、はさみを取り出す。なぜ、はさみかは教えられません。

「最近、バイク壊してばっかだから……」

そう言いながら、バイクの鍵穴に、はさみを突っ込もうと（よい子、悪い子は、絶対に真似しないでね。正義の味方、ゼイファーマンと

の約束だよ）した瞬間…。

「おいっ！」

背後から、声がした。

「ぎい！」

翔助の体が驚きで、ビクン！と反る。

どうやら、誰かが来たようだ。

恐る恐る振り返ると…。

「てめー、俺のバイクに、なにしようとした！」

さつき、屋上にいた不良の長、多摩巨人が一人たたずんでいた。同じくリーゼントにした長身の男の登場に、翔助は少しビビる。どうやら、このバイクは彼の物のようだ。

「バイクを見てただけじゃ！」

翔助が、はさみ片手に言い返す。

すると、多摩巨人が、翔助の手に指を示し…。

「そのはさみ、なんだ！？」

と叫ぶ。

「バルタン星人の真似してたんじゃー！」

「はさみ、一本足らねえぞ！ボケー！」

そして、二人は睨み合う。

「やんのか！？偽バルタン星人！？」

「うるせえ、背高いからって、見下してんじゃねえぞー！」

この勢いで、二人は喧嘩を始めた。

………

のちに、翔助はこの喧嘩について、こう語る。

「俺は、いろんな奴と喧嘩してきたよ。だが、後にも先にも、あんな激しい喧嘩は初めてだったよ」

そう彼は、自慢に語る。

「最初は、互いに拳で殴り合った。すると、相手は蹴りをかました。それに対し、俺は（中略）そして、俺は必殺アッパーで勝った。あの時、ポケットに入っていたキン肉マン消しゴム、略して、キン消しがなかったら、負けていたかもしれない…」

かなり際どい、勝利だったようだ。

「そのあと、奴とビールで乾杯し、互いの喧嘩の健闘を讃えたよ…」
そう、十八歳の童貞留年不良学生、名塚翔助は語る。

ただ誤算は、このあと、飲酒していたのを先生に見つかって、謹慎を受けたことだ。

転校初日に、停学を食らうヒーロー、ゼイファーマンをみんなで応援しよう！！

……………

第7話「翔助の怒りと、地球に落ちた復讐鬼（前編）」

.....

どこの場所にも、自分よりも弱いと思つた者に、イジメを行う者は入る。

地球に落ちた謎の物質は、天声高校に来て、それを知る。

夕暮れの校舎裏から、生々しい暴行音がした。

「明日まで、金持つて来いって言つたろ！」

校舎裏で、金髪のロン毛の生徒たち数人が、一人の目立たない感じの少年の腹部に拳を打ち込みながら叫ぶ。

「勘弁してください！もう、お金は……」

殴られながら、与島歩よしま あゆむは叫ぶ。

だが、彼らは容赦なく、彼を殴り付ける。

これは、ほぼ毎日のように、この校舎裏で起きている。

「……」

地球に落ちたなにかは、どこからか、そんな彼の姿を眺めていた。

そして、謎の物質は意志があるかのように、岩石のような体を、コロコロと動かしはじめた。

物質は、与島歩に向けて転がる……。

後日、彼に暴力を加えた金髪のロン毛の生徒たちは、原因不明の重傷を追う。

全員が全員、強靱な力の持ち主から、素手で徹底的に殴られたようなケガだった。

彼らに起きた出来事は、あの地球に落ちた物質しか知らない。

………
翔助の謹慎が、解けた数日後…。

ホームルームが始まる数分前。

翔助は、自分の席に座り、クラス委員の夏木風奈から、指導を受けていた。

「あなたは初日から、学校で飲酒とは！！馬鹿じゃないですか！！」
真面目な風奈には、翔助の行動は信じられないものだった。

（８２か？いや、結構、胸あるな…）

説教を聞き流しながら、彼女の胸元に視線をやり、スリーサイズを予測していた。

まさに、外道。

「今後、気を付けてください…」

やっと、彼女の説教が終わる。

それに合わせ、翔助は両腕を広げ、大あくびをする。

その態度は、風奈の怒りに触れる。

（だから、ヤンキーは嫌いなものよ…）

心の中で、そう言った。

………

昼休みになり、翔助は不良の溜り場である屋上に向かっていった。

「あー、ヤニ吸いてー、ヤニ」

と言いながら、歩いていると…。

「あつ、名塚君」

目の前に、秋野が。

ばったりと、会ってしまった。

うるさい奴に、出会ったと翔助は思った。

（まともな女、居ないなここ…）

「風奈の説教、どうだった？」

朝のことを、彼女は掘り出す。

「関係ねえだろ…」

そう言つて、彼女を押し退け、また屋上へと歩くと…。

「ん！」

顔に、大きな青痣を負った少年が。

彼は、与島歩だ。

制服も砂ぼこりを被り、ボロボロだ。

「与島君！どうしたの？」

と、秋野が彼に近づく。

与島歩は、また別の誰かに暴力を加えられたようだ。

「いや、さつき、転んじやつて…。大したことないよ…」

彼は、嘘をついた。

だが、それは、解りやすいまでに嘘だ。

嘘を言いながら、与島は、その場から逃げるように去る。

「なんだ、あのゴボウ野郎…」

横目で見ながら、そう翔助は言つた。

与島の歩き方は、ヨレヨレだ。

「どうしたんだろ、彼…」

秋野は心配そうに、彼を見つけめる。

「…」

翔助は、そっぴや、腹が減つたと思つた。

……………

やつと、学校も終わり、放課後。

翔助は問題を起こさずに、一日を終え、駐輪所に向かう。

駐輪所には、彼がローンで購入したゼファー750が。

そのゼファーに、翔助は見惚れる。

「やっぱ、格好良いな…。俺のゼファー…。やっぱ、単車はカウルなど付けない、ネイキッドよ…」

と、タンクに自分の顔を擦り付け、手でシートを撫でていると…。

「なに、やってんの…」

「！」

タンクから顔を離すと、目の前に、玄関から出た秋野の姿が…。

一部始終を見ていたようだ。

「…」

翔助の額から、嫌な汗を流す。

秋野は、呆れた顔をしながらバイクに近づくと…。

「なんか、地味なバイクだね」

「ああ!？」

その一言に、翔助は額に血管を浮き上がらせる。

彼女は、そのまま、タンDEMシートに腰を掛ける。

「なに、やってんだ!？降りろ!！」

「家まで、送っててくれない。手当てしてあげたでしょ?」

と言いながら、秋野はゼファアのタンDEMシートに腰を掛けた。

いつもなら、嫌だ!の一言を言う翔助だが…。

(バイク二人乗り〃後ろから、抱きつかれる〃背中に、胸当たる〃

バイクのブレーキ振動で…、ドスコイ!！)

「いいよ」

ものすごい笑顔で、彼女を家まで送ることを承諾した。

……………

天声高校の近くの陸橋の柱の影。

そこで、数人の髪を染めた同じ学校の不良達に、与島は囲まれていた。

「勘弁してください…。本当に、知りません…」

与島は、柱に背を預けて、彼と距離を取る。

だが、不良のリーダー格が与島の制服の襟首を乱暴に掴んだ。
そして、与島の腹を殴り付けた。

「うっ！」

「とぼけんじゃねえ！」

腹を押さえる与島に、不良のリーダー格は追い打ちを掛けるように、
髪の毛を乱暴に掴む。

「本当なんです…、知りません…。お願いします…、やめてください
…」

涙ながらに、与島は懇願する。

何故、彼が、今このような目に囲まれているのか…。

それは、先日、彼に恐喝をした不良達が、病院送りにされた事が原因。
因。

その仲間達の勝手な判断から、恐喝を加えられた復讐で、与島がや
ったということにして、彼を痛ぶりはじめた。
そもそも、不良らの行為が悪いというのに…。

次から次に、不良達が、与島に暴力を加える。

いくら、彼が泣き叫んでも、殴るのを止めない。

「おら！てめーがやつたんだろ！！」

「このもやし野郎が！」

不良達の暴言が飛ぶ。

与島の全身から、ひどい音が聞こえた。
すると…。

ピキッ…。

与島の背中から、皮膚が割れるような音が…。

殴られて鳴るような音ではない。

明らかに、不自然な…。

そんな音が鳴ったのも、知らずに、リーダー格が大きく拳を振り上げた瞬間…。

ブオオオオオー……ン!!!!!!

「!!」

そのマフラー音で、不良達の手が止まった。

すべての不良達が、爆音に近いマフラーの音に振り向く。

しかし、与島は振り向かない…。

振り向いた先には、ゼファーにまたがり、アクセルを全開にして吹かす翔助が。

「なに、イジメこいてんだ!!ゴラァ!!!!!!」

翔助が、血相を変えて叫ぶ。

ちようど、秋野を家に送った帰り（ちなみに、学校から歩いて5分ぐらいで、秋野の家だった）、ゼファーで流していたら、この現場に見つけたのだ。

「おい!あのリーゼントは、転校生で、多摩とタイマン張って勝った名塚だ!!」

一人の不良が、そう叫ぶ。

多摩は、天声高校で一番恐れられていた存在だった。

「てめーら、そこ動くな…。ゼファーで、足轢いてやかっからよ…。どうせ、弱いもん蹴るにしか使えねえから、要らねえだろ…」

目が血走りながら、翔助は言う。

その形相は、本気でやるつもり顔だ。

アクセルを、更に吹かす。不良達の表情が強ばる。

ピキッ…、ピキッ…。

「…?」

翔助の耳に、変な音が入る。

また、皮膚が割れるような音が。

前かがみに倒れた与島の体から、多く鳴り始めた。

「ひいー！」

翔助の登場で、びびった不良達は、その場から一斉に逃げた。

「待てや！てめーらみたいなのは、ム力つき過ぎて反吐が出んだよ！……！」

ゼファーから、降りた翔助は逃げる彼らに向かって叫ぶ。

そして、倒れ異音を放つ与島に駆け寄る。

「おい、ゴボウ。大丈夫か……！」

そう言いつと、与島は顔を上げた……。

「！？」

翔助は、驚愕した。

ピキッ……ピキッ……と音を出しながら、与島の顔が変形しはじめた。それどころか、体全体から音が鳴り、骨やら、皮膚やらが変形した。徐々に、与島の姿は異様な肉体に。

手先は、岩石を貼りつけたよう皮膚と爪。

制服を破り、その岩石のような異質な肉体が現われ、顔はもはや、石で作った龍の彫刻のように変形した。

もはや、人間の姿ではない……。

ピキッ……。ピキッ！

音が止まった。

翔助の目の前には、人間ではなくなった与島の姿が……。

「こりゃ、ただ事じゃねえな……！」

翔助は、自分の胸に手を当てた。
すると……。

カッ！

胸に当てた手を中心に、大きな光を放ち、翔助もゼイファーマンに変身した。

「ぐおおおおお！！！」

怪物と化した与島は、叫ぶ。

その声は、どこか虚しかった。

.....

第8話「翔助の怒りと、地球に落ちた復讐鬼（後編）」

.....

与島歩の姿が、変貌してしまったのは、地球に飛来した謎の生命体が寄生したからだ。

その生命体には、知識がある。

だから、イジメられていた与島に寄生し、彼の肉体を一時的に支配し、彼をイジメた不良達に暴力の仕返しを与えた。

生命体は、許せなかった与島に暴力を加えた者達が。

.....

「どけ……。貴様には用はない」

与島の異形の姿が、ゼイファーマンに話し掛けた。

「てめー、ゴボウ野郎じゃねえな……」

ゼイファーマンの意識は、翔助自身であるが、与島の場合は意識を支配されているようだ。

岩石を削って出来た彫刻のような顔の異形の与島の口が、開いた。

「私は、名もなき宇宙の片隅で生まれた知識を持つ鉱物体。エイミネイターと、自分で名付けた……」

「おりゃ、宇宙の平和を考える会のゼイファーマン（本当は、マッスル星人）だ……。一応、地球人だ……」

一応、ゼイファーマンも名乗る。

「私は、宇宙を漂っていた途中、地球の引力に引かれ……」
「勝手に、話し進めんな！」

自己紹介したのに、無視されたゼイファーマンの額に、青筋が浮く。それでも、エイミネイターは語りだす。

「私が、来るつもりもなかった地球に落ちて見た光景は、信じられ

ない物だった」

エイミネイターの岩石のような表情が変わった。

「地球人が、同じ地球人に対し、暴力を行う醜き姿だ。同じ赤い血が流れている者を、殴る蹴るだのと！しかも、きゃつらは、赤い血が流れても、なにも思わず、蹴る殴る！蹴る殴るだ！！殴られた相手は、苦しんでいるというのにだ！！！」

その言葉に迫力には、ゼイファーマンは驚く。

「だから、私は暴力を加えられた与島歩の肉体を借り、醜き暴力を働く奴らを排除する」

排除という言葉に、ゼイファーマンは反応した。

「なんだと！」

喋りっぱなしだったエイミネイターに、一言投げた。

「さっきまで、与島歩に暴力を加えた奴らを、この世から消す！！」

「待てや！！」

ゼイファーマンは、エイミネイターの首を掴んだ。

「離せ！ゼイファーマンとやら！！」

「確かに、ム力つくけどよ、あのクソ野郎共殺す気か！やめろ！！」

「奴らに、生きる価値などない！！邪魔するなら、貴様も排除する！！」

そう叫び、エイミネイターはゼイファーマンの腹に蹴りを入れた。

「ぐっ！」

首を掴んでいた手を開いて、ゼイファーマンは後方に吹っ飛んだ。

更に、追い打ちを掛けるように、エイミネイターはゼイファーマンの顔面に拳を打ち込む。

口から、血が吹き飛ぶ。

「いい気なんな！！」

殴れた勢いに耐え、踏張ったゼイファーマンが叫ぶ。

「あのようなイジメを働く者は、消えてしまえばいい！それを、邪魔する貴様も消えてなくなれ！！」

ゼイファーマンも拳を上げ、エイミネイターの顔面を殴り付けた。

「あいつらにも、親がいんだぞ！血流れて、生きてんだぞ！！妙に正しいこと言って、自分を正当化すんのは、反吐が出んだよ！」

ゼイファーマンの拳が当たり、エイミネイターがもたつく。

「それでも、奴らは消す！」

「岩みてえな顔のくせに、屁理屈こねるな！！」

互いの拳が、互いの顔面に入った。

そして、その勢いで双方、本気で殴り、蹴り合う。

皮膚が裂け、血が飛び、土に血が染み込んでいく。

「おらあ！」

エイミネイターの首を掴み、腹部に何発も膝蹴りを浴びせた。

口からは、血が吹く。

「ぐう！！」

ゼイファーマンの顔に、エイミネイターは自らの頭部を突っ込んだ。

鉋物のような硬さを持つ、エイミネイターの頭部の衝撃を直に浴び、

ゼイファーマンはふらつく。

鼻血が、飛び散った。

「野郎！」

エイミネイターの顔に、拳がめり込む。

「貴様！」

ゼイファーマンの顔にも、同じく拳がめり込む。

何度も、何度も、互いを殴り付ける。

雨あられのように、血が飛ぶ。

この状態が、しばらく続いた…。

双方、ハイになっていた。

………

あれから、時間が流れた…。

「べっ！」

ゼイファーマンの拳が裂け、血を流す。

大きく息を吸って、口から血を吐いた。

「はあはあ……」

全身ボロボロで、血を流しながら、前かがみに倒れるエイミネイターを、ゼイファーマンは見た。

どうやら、殴りあいの末に、ゼイファーマンはエイミネイターを倒したようだ。

「ぐっ……」

全身ボロボロで、血を流すエイミネイターは、弱々しく顔を上げた。顔を上げた先には、ゼイファーマンの血まみれの姿が映る。

「貴様あ！」

エイミネイターには、こんな虚勢を返すしかなかった。

まだ、立ち向かって来るような顔つきをしている。

「おい、てめ……」

ゼイファーマンが、倒れているエイミネイターに話し掛ける。

「そんなに、納得できねーなら、一旦、俺に任せてくれねえか？」

そう言って、ゼイファーマンは膝を地面つけた。

かなり、疲労しているようだ。

果たして、言葉の意味は……。

………

翌日の学校のホームルーム前。

翔助は、先日の怪我を負いながら、廊下を歩く。

生々しい傷跡を、すれ違う生徒達に見せながら歩く。

そして、翔助は、他のクラスの教室の前に立った。

ここは、先日、与島に暴力を加えた不良達が居るクラス。

そこに、翔助は、いきなり上がり込む。

すると、昨日の不良達が居た。

彼らは、翔助の登場に驚く。

「名塚だ！」

「なにし、きやがった」

翔助は、ズガズガと不良達の元へ向かう。
そして…。

バゴツ！

鈍い音を上げ、不良達の一人の顔面に拳を入れた。

「うごお！」

吹き出た鼻血を、不良は押さえて倒れこむ。

「きゃあああ！！」

一人の女子生徒が、悲鳴を出し、廊下まで響く。

不良達は、翔助の行動に震え上がる。

「てめーら…」

昨日、殴られて切れた唇を開き、翔助は言葉を発す。

「ただじゃ済まさねえ…」

そう言い、不良達に次々に殴り付けた。

翔助は、昨日の彼らが与島にしたように、手加減なく、何度も殴り付けた。

……………

そして、不良達を全員沈めた翔助は、顎を殴って、気を失わせたり
リーダー格を制服を握り、引きずり歩く。その光景は、いくらなんでも、非道極まりない。

廊下には、血が落ち、すれ違う生徒達は怯え、道を開ける。

生徒達には、翔助が鬼に見えた。

「おい！与島居るか！！出てこいや！！」

翔助が、そう叫ぶ。

どうやら、リーダー格を痛め付けたことを与島に伝えようとしている。

スタッ…、スタッ…。

頼りなさげな足音が、聞こえてきた。

「ひっ！」

エイミネイターから、元に戻り、意識を取り戻した与島の姿が。当然、昨日のことは覚えてはいない。

やはり、彼にも先日 of 怪我の後が見える。

翔助が、リーダー格を与島の方に投げ付けた。

「うわぁ！」

血まみれのリーダー格の姿に、与島は驚く。

「昨日、おめえ、こいつにやられてたろ…。やり返してやったぜ…」
翔助は、そう与島に言いながら、また投げ付けたリーダー格を蹴った。

与島は震えながら、そのリーダー格の負傷を見る。

「ほら…、お前もやれよ…。煮るなり、焼くなり…」

翔助は、誘うように言い寄る。

与島は黙り込んで、震え上がる。

冷や汗を、大量に流す。

与島の脳裏に、今まで、彼らから与えられた暴力、嫌がらせを受けた屈辱と苦痛の日々が甦る。

身も心も、ズタズタにされきったあの日々が…。

だが、今の彼の立場は、逆転した。弱りきった不良を、痛めつけられる…。

仕返しが出来る…。

今までの恨みを、晴らすことが可能だ…。

与島の心に、復讐の気持ちが湧いた。

だが…。

「勘弁してくれ！！俺が悪かった！！」

気を失っていたリーダー格が、気を取り戻した。

「……！」

その声で、与島に芽生えた復讐の気持ちが始めた。

「今更、おせえんだよ！謝って済んだら、マッポも、仮面ライダーも要らねえんだよ！！タコが……！」

そう叫びながら、翔助はリーダー格を、また蹴る。

惨めなまでに、リーダー格は泣き叫ぶ。その姿に、与島は自分を重ねた……。

すると……。

「やめろ……！」

「……！」

「……！」

思わず、与島は叫んだ。

翔助は蹴りを止め、与島を睨んだ。

「ああ？」

与島は、翔助から目を逸らさず、また叫んだ。

「もう十分です……もう止めてください……！」

「なんだと……」

翔助は、与島の襟首を掴む。

「もう嫌なんです！誰かが、殴られたり、蹴られたり、脅されて、自分を惨めだと感じるさせるのが……もう、あんな思いするのも、させるのも嫌なんです……」

与島は、涙ながらに言う。

「……」

その言葉を、血を流しながら、リーダー格は聞き、黙り込んだ。与島の襟首を握りながら、翔助は……。

「てめー、そんなんじゃない、また、イジメられんぞ……」

そう言う。

「イジメなんか、一生の内の一瞬の辛さでしかありません。明日には、きつと幸せが来ると信じてます…」

与島のその一言で、翔助は襟首から手を離れた。

そして、倒れこむリーダー格を睨み付けながら…。

「良かったな、こいつが、お人好しで…。昨日の件は、これで勘弁したらあ。でも、俺はてめーらみてーなの嫌いだから、また、俺をム力つかせたら、こんなんじゃ済まさねえぞ…」

そう言い去り、翔助は去る。

リーダー格は、あとから来た仲間たちに、引きづられ、保健室に向かうため、同じく立ち去った。

「はあはあ…」

緊張の線が切れた与島は、その場で腰を抜かした。

呼吸が乱れて、ヘトヘトだ。

この光景を、周囲で見ていた野次馬の生徒たちが、へたりこむ与島の元に詰め寄り…。

「すげーな、お前、根性あんな！」

「見なおしたよ」

「ケガないか？」

と、言い寄る。

今まで、存在感のなかった彼が一躍、生徒達の注目を浴びた。

これなら、与島はもうイジメられても大丈夫であるだろう…。

そう与島に、寄生するエイミネーターは思う。

（ゼイファーマンこと、名塚翔助よ…。わざと、悪役となり、与島歩という人間の強さを教えてもらった今回は、私の負けだ。だが、世の中は、このような事態が繰り返される物…。だから、まだ与島歩の体に寄生する…。貴様には期待するが、私を失望させてくれるなよ…。貴様なら、なにかを変えてくれかもな…）

与島の体内に寄生しながら、エイミネーターは翔助のこれから祈った。

.....

「ふー」

屋上で、翔助はタバコを吸っていた。

今回、与島への暴力が原因とは言え、不良達をボコボコにしてしまったため、学校中から非難を買ってしまい、学校側の処分もあるに決まってるので、さすがの彼にも答える。

「退学になったら、どうしよう……。また、プーかな……」
そう言い、下を向いた。

落ち込む彼に、学校のチャイムが鳴り響く。

.....

第9話「いい男の運命」

……
前回の件は、反省した不良達が学校、警察側に不問ということにし、翔助の暴力沙汰は正当防衛（実際は違ったが）ということとなり、なんの処分も下らなかった。

しかし、あの件は、学校中の話題になり、翔助に対し、皆恐怖した。そんなことがあり、翔助は居ずらさを感じる。

昼休みの屋上。

ここは、お馴染みの不良の溜り場。

そこに、翔助と多摩が居た。

「さすがに、やりすぎでしょ…。俺も、あいつらにはムカついてたけどさ…」

タバコをくわえながら、多摩は言う。

ちなみに、翔助がした暴力の事情は知らない。

「おかげで、みんな道避けるしょ…。秋野しか、話し掛けて来なかったぜ…」

そうタバコを床に押し消しながら、言う。

「あの女、なっちゃんに気あるんじゃないの？」

「なっちゃんって、呼ぶな…」

新しい翔助の呼び名だった。

そして、話の話題が秋野に変わった。

「秋野、結構いいと思うけどさー」

多摩が、そう言う。

「うぜー女だよ…。あいつは…。でも、あいつの腰から尻のラインは、結構エロくていいけどさ…。でも、俺には、あいつの胸のサイズじゃ満足できんし…」

「……」

翔助の異様なまでのエロ観察力に、多摩は引く。
それが、男の性と言うものであるうか。

………

授業も終わり、放課後。

翔助は、自分のゼファーを置いている駐輪所まで、歩いている。

やはり、歩きたびに、普通の生徒たちが散っていき、不良の輩達には、頭を下げられる。

妙な居ずらさを感じながら、駐輪所に辿り着くと…。

「おい！」

ゼファーのタンデムに、秋野が腰を掛けて、翔助に手を振っている。

翔助は、ため息を吐いた。

「また、てめーかよ……。歩いて帰れ……。(家、学校から、歩いて5分だったじゃねえかよ……)」

「いいじゃん。乗っけてくれたってー。あたし、このバイク好きだし。」

名前、ゼータガンダムだっけ？」

「ゼファーだ！ゼシカ合ってねえ！」

そう言いながら、ふと目を離すと…。

「ん？」

駐輪所にある一台のバイクに、目が行った。

すると、翔助は、ハッ！と反応し、秋野を無視して、そのバイクの方に駆け寄る。

そして、バイクを直視すると…。

「こっ！これはー！」

ベタなりアクションを、思わず取った。

ゼファーのタンデムから、降りた秋野もそのバイクに近寄る。

「なに、これ…？」

驚く翔助に、そう言い寄った。

「カワサキ、Z2直系モデル、Z750FX…。ほとんどが、ゾッキー（暴走族）に改造され、まともな状態で残ってんのが少ないと言われているが、このバイクは、ほぼノーマル…。いいキャブ使ってんな…。こいつ…」

と、バイクの説明しながら、翔助は、よだれを垂らす。

「ゼット・ナジン・エ。ベックス？」

秋野が、また名前を間違えた。それはレコード会社だ…。とツッコみたい気持ちを、翔助は抑える。

わざと言ってるのか、マジメに言ってるのか、解らないのが、秋野という少女だ。

「誰乗ってんだ、これ…？」

そう翔助が、言っと…。

ざわっ…。

妙な気配が、翔助の背中を刺す。

不良として、ツッパリ続けた百戦錬磨の翔助の神経が背後の気配を危険と認識した。

「誰だあ！」

思わず、振り向くと…。

翔助は、絶句した。

背後に居たのは…。

「どうしたい？」

背後には、担任教師の阿部高和が居たのだ。

「あっ！阿部先生ー」

「名塚に、秋野じゃないか。いいのか、ホイホイ、こんな遅くに学校に居て」

「まだ、3時半じゃないですー。先生ー」

何気ない会話を、二人はする。

だが、翔助は、なぜか嫌な冷や汗を流す。

彼本人も、汗を流す理由がわからない。

（今だに、この先公には掴み所がない…）

翔助は、そう思った。

先日の暴力沙汰についても、阿部高和は咎めず、注意しただけ。

それが返って、不信でならない。

得体の知れない感覚を感じる翔助を尻目に、阿部は、例のFXに近づく。

「ところで、こいつ…。俺のバイク…。こいつを見て、どう思う？」
そう言いながら、阿部はFXにキーを差し込んだ。

「でっ！」

「えー、このバイク、先生のー！！」

FXの乗り手が、阿部だと言うことを知り、二人は驚く。

秋野は、すごい！を連呼。

翔助は驚きのあまり、口を開け、鼻水を垂らす。

阿部は、不適に笑みを浮かべる。

（この得体の知らない先公が、FXに乗ってるだあ…）

ちなみに、ゼファー750は最近生産が終了したとは言え、限りなく入手可能であり、暴走族などによる改造のベース車両に使われるFXは、ノーマルに近い状態では品薄なので、高価なバイクと言われている。

という理由で、翔助は敗北感を感じた。

「乗らないか？」

エンジンが点火したFXにまたがる阿部は、秋野に言う。

「はーい！乗ります！」

「ウホッ！！」

迷う事無く秋野は、FXのタンデムに飛び乗り、阿部の後ろに座る。

翔助は、さっきまで送ってと頼んでいた秋野に無情にも無視された。

「秋野！てめー、俺のゼファー乗ってたんじゃなかとか！！」

乗せるのを断つてたくせに、悔しかったせいか、翔助は秋野に向けて叫ぶ。

だが…、時は遅く…。

ブオオオオオーーーン！！！！

激しい排気音を、マフラーから放ち、FXは疾風のように駆け抜け、阿部と秋野は消えて行った。

「待てよ！おい！俺も乗せてえ！！」

翔助は、一瞬で走り去るFXのテールランプを泣きながら見つめる。傍若無人な彼が、初めて感じた敗北感だった…。

謎の担任教師、阿部高和は、意味も解らぬうちに、翔助の障害となつて行く…。

……………

学生寮までの帰り、ゼファーを引きずりながら、翔助は泣いていた。憧れのFXを、訳の解らぬ、いい男の教師が乗っていることが悔しくてたまらなかった。

そして、帰り道の細い小道で…。

「ははは！私は、通せんぼ星から来た、ミチトオサンだ！この道を、通りたくば…」

いきなり、目の前の小道から宇宙人が出現。

奴は、道を通さない妨害型宇宙人だ。

この道を通るには、ミチトオサンを倒さなければならない…。

カッ！

泣きながら翔助は、ゼイファーマンに変身して、迷いもせず殴り飛ばした。

.....

第10話「逆境の翔助」

.....

スポットが当たらないが、翔助は、現在学生寮に住んでいる。

彼の部屋は、ゴミで溢れ、散らかっている。

そんなゴミの中で、翔助はスヤスヤと眠る。

とつくに学校の始業時間になっているのも知らず…。

昨夜は、夜遅くまで多摩と飲み明かしていたせいで、朝九時になるまで、目が覚めなかった。

.....

「やべえな…」

ゼファーを駐輪場に停め、焦りながら、三階にある教室に向かう。

また、あのうるさい風奈から説教を食らうな…。

そう思いつつ、自分の教室の前に立つ。

それにしても、何故か、静かだ。

授業が始まっているなら、先生の声ぐらいはするはず。

なのに、このクラスは静かだ。

そんなことは、気にせず、翔助は教室のドアを開けた。

「ちいーす…」

ひそひそと、翔助は教室に入る…。

すると…。

ガチャッ！！

「！？」

教室に入った矢先に見たのは、静まり返るクラスメイトたちと、見

たのこののない宇宙人一人の姿が。

宇宙人は、いきなり手に持っていた銃を翔助の額に突き付ける。

「なんだ、貴様は……」

銃を握りながら、宇宙人は言う。

翔助は、状況が読み込めず、とりあえず両腕を上げた。

「なに、この急展開……」

……
話は、翔助が学校に来る数分前に遡る。

ホームルームが終わり、一時間目が始まる間に、三階のこのクラスの窓を突き破り、マークジャックという宇宙人が乱入した。

マークジャックは片手にマシンガンと、強靱な爪が手足に生えた凶悪な顔をした宇宙人。

そして、このクラス全員をマシンガンで、身動きを取れなくさせ、人質にし、学校の他の人間達、警察が助けに来れないような状況を作った。

マシンガンを構えながら、彼はこう言った。

「私は、我が星の文明の進歩のため、君ら地球人をサンプルとして宇宙船で持ち帰らせてもらう。生憎、私が先に単独で先に来たため、仲間が宇宙船と一緒に来るまで、君らにはおとなしくしてもらう……」
マークジャックの凶悪な表情に、誰も悲鳴を上げられず、ただ震えた。

そして、翔助は遅れて、人質になった。

問題は、クラスメートが大勢居る中で、ゼイファーマンに変身が出来ないこと。

正体がバレてしまうのは、変身条件を破ることになる。

このような状況下で、翔助はマークジャックを倒せるのか……

机、椅子はすべて後ろに下げられ、クラス全員が床に座らされた。皆、誰一人として恐怖が隠せない者は居ない。男女構わず、泣きだす者が出てきた。ちなみに、教室にあの阿部高和教師は居ない…。

………

そして、職員室。

教員すべて集まり、マークジャックへの対応を相談していた。校長は、電話の受話器に手を当て…。

「警察を呼ぶんだ！」

だが、阿部教師はその手を止める。

「待って下さい！奴の手には、武器があります！警察を呼んだら、人質にされたクラス全員の無事は保障されません！！」

マークジャックの要求は、人質にしたクラス全員だから、交換条件や話し合いでは通じない。

だから、警察が来ても意味はなく、むしろ逆上してしまうかもしれない。

そのような判断が出来た阿部教師は、同時に、どうすれば良いのかと頭を悩ませる。

………

マークジャックは、教壇の上に腰を掛け、クラス全員の様子を見下ろす。

その姿は、不気味で、皆に無力感を感じさせる。

翔助は、珍しく困る。

（さっきから、変身しよう思っても、出来やしねえ…）
やはり、セキュリティのような物が働いているらしい。

すると、翔助の頭に誰かの声が響く。

それは、自分の身体に取りついたマッスル星人の声。

彼は、こう述べる。

・変身は、基本的に翔助の独断。だが、あくまで宇宙人絡みであること。

・宇宙人絡みでなくとも、翔助の致命傷、命に関わる事故、過失が起きた場合、自動的に変身。致命傷にならない怪我は、変身する条件に入らない。病気も含まれない。

宇宙人絡みであっても、他人の前では、上記の理由を除き変身は不可。だから、さっきのように銃を突き付けられても変身は不可。だが、銃が撃たれ死にそうになった、この場に他人が居なかったであつたら、変身可。

・変身前、変身中に負った怪我は変身解除後には残る（マッスル星人には、治癒力がないため）

・他人に正体がバレたら、契約違反により、翔助、マッスル星人の存在は消滅する。死よりも、辛いことになる。

以上のことが、翔助の頭に響いた。

今更、説明すんな！と、心の底で言う。

しかし、上記のルールに引つ掛からない変身法が見つからない。

マークジャックが、自分に向けて銃を撃ってきたら、クラスメート達の前であつても変身は出来るが、正体がバレる。

また、下手に変身したら、奴を刺激してしまうかも知れない…。

翔助は初めて変身出来ない境地に置かれ、苛立ちを感じた。

「大丈夫、きつと、なんとかなるから…」

秋野は、泣きだしたクラスの女子を慰める。

このような絶望的な状況下であっても、彼女は取り乱さない。

その姿には、翔助もタフだなと感じざるえない。

「やべーよ…」

「死にたくねえ…」

クラスの男子たちは、膝を抱え情けなくも取り乱している。仕方はないことである。

クラス委員の風奈も、動揺しているが、必死に抑えている。

この状況のとりあえず、なんとか変身出来るよう、翔助は出来る範囲のことを試す事にした。

作戦その1

翔助は、マークジャックに見えるように手を挙げる。

すると、マークジャックはマシンガンを向けて…。

「なんだ？」

そう聞いてきた。

「あの一、さつきから腹痛いんですよ…。トイレ行ってもいいですか？」

翔助が考え付いた作戦は、トイレに行き、変身するというシンプルな作戦。

（ふふふ、さすが不良界のキラと言われる俺…。これなら…）

「あと、一時間で宇宙船が来るから我慢しろ…」

冷静に返された。

「いや、漏れそうなんですよ!」

だが、翔助は必死に食い下がる。

しかし…。

頭に、銃を突き付けられた。

「治まりました…」

作戦は失敗した。

この作戦により、クラスメートから、緊張感がない、デリカシーがないなど非難を浴びた…。

「名塚君、絶対漏らさないでよ!!!密室だし!!!」

「うるせえ!!!（嘘だよ）」

秋野に余計な心配をされた。

作戦2

「あつ！UFOー！」

いきなり、そう叫び、窓に指を差した。

皆、窓に注意が行った瞬間を狙い変身。

というアイデアだったが…。

また、頭に銃を突き付けられた。

「なに、言ってたんだ？てめー」

誰一人として、窓に注意を向けなかった。

これにより、また周りから非難を買う。

「UFOなんて、居るわけないじゃん。バカだねー」

「…」

秋野から、ダメ出しを受けた。

目の前に宇宙人が居るから、とりあえず、UFOは否定出来ないが、あと何故か、秋野からバカと言われると、妙に腹が立つ翔助であった。

作戦3

翔助は、急に立ち上がった。

そして…。

「なんで、こんなことをするだ…」

いきなり、マジメな空気を漂わせ語り出す。

「こんなことをして、なんになるんだよー！」

続いての作戦は、マークジャックへの言葉による武装解除。

世の中には、ペンは銃より強しという言葉がある。

だから、なんとなく相手に罪の意識が芽生えるようなことを言って、

罪悪感により武器を捨てさせ、戦わせる手間を省かせる作戦だ。

「うるさいよ…」

「えっ…」

だが、奴には罪悪感などなかった…。
また、作戦が失敗した。

これにより、マークジャックの怒りが、更に燃え上がり、クラス全員から…。

「てめー！いいかげんしろ！！」

「ふざけてる場合じゃないんだよ！！」

「だから、ヤンキーは！」

手に負えないくらいの非難を買った。

さつきから、恐怖に震え怯えていた風奈も、とうとう怒りが沸点に達し、その場から立ち上がる。

「あんたは、なんで、そんなに空気読めないの！！だから、暴力問題とか起こせるのね！！バカじゃない！！頭悪いつて、レベルじゃないわよ！！あんたみたいな人間、死んじゃええ！！！！」

その言葉で、他のクラスの者たちは黙った。

いつも怒っている彼女だったが、今回ばかりは強烈だ。

「…ッ」

これには翔助は、なにも言わず、ただ立ちすくむ。

絶望的な状況下ゆえに、彼女の気持ちも解るが、さすがに、強烈だったようだ。

「ちよつと、言い過ぎだよ！」

秋野だけが、彼女に反論した。

しかし、風奈の翔助に向ける眼光の鋭さは半端ではない。

「てめーら！！静かにしろ！！」

この一連の騒ぎに、マークジャックが一喝する。

それで、風奈は再び、膝を床に置く。

翔助は、無言で立ちすくむ。

そんな彼に、マークジャックは…。

「おい、さつきから、うるさいリーゼントの山猿…。なに考えてるか知らないが、この俺は怒っている。こいつらの命保障出来るか自分でも解らねえ…。だから、許して欲しければ、俺の目の前で、土下座しろ…」

マークジャックは、そう告げた。

土下座という屈辱的なことを強いられながらも、翔助は黙り込む。

「そうだ！やれよ！」

口火を切って、鳥田が叫ぶ。

同じく、翔助のさつきからの行動に腹を立てた者たち、皆が翔助に土下座を示唆する。

「みんな！やめてよ！」

秋野は、そのように言うクラスメート達を止める。

しかし、翔助は言われるがまま、教壇の近くに行く。

そして…。

「すみません…。どうか許して下さい…。こいつら、巻き込むのだけやめてください…」

そう言い、翔助は額を床に付け土下座した。

それを見て、マークジャックはゲラゲラと笑い転げる。

クラスメートたちは示唆したとはいえ、少し黙り込んだ。

皆、啞然とする。

「翔助君…」

唯一、取り乱さない秋野が、初めて震えていた。ガクガクと、拳を握りながら…。

翔助の土下座を、無言で風奈は見ている。彼女の瞳が、少しだけ動揺した。

笑うマークジャックが、また一言言う。

「顔上げる…」

翔助は、それで土下座を止め、立ち上がると…。

バゴッ！！

「グッ！！」

立ち上がった翔助の顔、無情にも蹴る。

翔助の口から血が吹き、更に、腹部を蹴り上げられる。

これには、クラス全員に戦慄が走る。

風奈は、目を見開き、引きつった表情をする。さすがに、あまりのマークジャックの横暴さに怒りを覚えた。

「翔助君……」

マークジャックの仕打ちのひどさに、秋野は下を向いて目を背ける。

翔助は腹部を押さえ、前かがみに倒れる。

苦しそうな表情を浮かべた。

それを見て、マークジャックは笑い転げる。

とことん歪んだ性根をしている。

だが……、マークジャックは一つ墓穴を掘った……。うずくまっているが、翔助の目は死んではいない。

それどころか、まるで、これからエロ本を買いにでも行くような楽しみを抑えているようだ。

そんな翔助の心の中は……。 (変身出来たら、こいつの顔面に何発打ちこむか……。あと、俺様をコケにした風奈に、あんなことや、こんなことを……)

マークジャックは知らなかった。

翔助の性根は、マークジャック以上に歪んでいるのが……。

宇宙船が来るまで、あと三十分。

……

第11話「落ちてやるが、心までは堕ちないぞ」

.....

この異常事態は、すぐに口渡りで次々と、学校中に伝わる。当然、隣のクラスの多摩にも…。

「なっちゃん（翔助）が、宇宙人に捕まった？」
突拍子もないことだが、現実には起きているので、多摩も状況を飲みざるえない。

他の不良達も、翔助の安否が気になっていた。

学校側も、何度もマークジャックにコンタクトを試みたが、すべて拒否。

校長、阿部教師ら、すべての教員が苛立ちを隠せない。
奴の仲間が来るまで、あと30分…。

.....

教壇に腰を掛け、意気揚揚としながら、マークジャックは自分の肩を、翔助に揉ませていた。

相変わらず、クラス全員は恐怖でうずくまる。

あと数分したら…、宇宙船に…。

そんな考えが、彼らを支配する。

だが、そんな状況であっても、秋野はめげずに他の生徒達を励ます。
風奈は、うつむいたままだ。

「ん？」

マークジャックの肩を揉みながら、翔助は奴が入ってきた窓際を見た。

窓ガラスは割れ、周囲に破片が広がっている。

（三階から入ってきやがったか…。なるほどな…。三階なら、外の状況は解るし、警察が突破しにくくなる…）
などを考えていると…。

（三階…。窓…）

急に、翔助の頭になにかが浮かんだ。

今まで、状況のせいで変身不可だったが、三階というキーワードが翔助の直感を押す。

だが…。

「おい…」

肩を揉んでいるマークジャックが振り向いた。
そして…。

バゴッ！

マークジャックは、マシンガンで翔助の顔を殴り付けた。

「ぶっ！」

さつき怪我した部分が、殴られたことにより、更に膨れ上がる。
口からは、また血が流れる。

「てめー、力入れたろ！痛かったぞー！」

そう言いながら、マークジャックは殴られた顔を押さえる翔助を蹴る。

ただ、肩を揉まれていて、少し痛かっただけで、奴は殴り付けた。

その横暴さに、クラス全員は、また悲鳴を上げた。

しかし、そんな時…。

「いいかげんしろ！！このバカ宇宙人！！！」

秋野が立ち上がって、激怒した。

とうとう、彼女の堪忍袋が破れた。

それには、クラス全員が彼女の方に振り向く。

「葉月！やめなさい！！」

風奈も立ち上がり、秋野を止めに入る。

だが、秋野はよほど頭に来たらしく…。

「サンプルだの、なんだのって！武器持って、脅しかけて、バカじやない！！それで、一方的に殴り付けたり、蹴りつけたりして！！バルタン星人も、メトロン星人もやらなかったわよ！バーカ！！バーカ！！」

今まで、見たことないくらい秋野は叫び散らす。

それに、マークジャックは逆上してマシンガンを構えた。

「この女！」

しかし、銃口を向けられても、秋野は動じない。

それどころか、面と向かってマークジャックの目を睨む。

「葉月！やめなさいって！！バカは、あんたよ！！」

そう言つて、風奈は秋野の手を引っ張る。

何度も彼女に謝らせようと、風奈は説得する。

しかし、マークジャックの怒りは大きかったようで…。

「舐めた口を、聞きやがって！！」

激情し、引き金に指を掛けた。

その時…。

ガシャン！！

「！？」

急に窓ガラスが割れる音がした。

音の方に、皆一斉に振り向く。

そこには、窓ガラスを殴って右拳を血に染めた翔助の姿が。

額に青筋を浮かせ、マークジャックを睨み付ける。

「秋野の言つとおりだぜ…。このウンコ宇宙人…。マシンガン盾にして、些細なことに反応しやがって…（早漏が）」

マークジャックは、マシンガンを翔助の方に構え直す。

「貴様！」

「ああー、貴様みたいなキツタネエ宇宙人に殺されるくらいなら、こっから飛び降りた方がマシ」

そう言う翔助を、クラス全員が固唾を飲んで見る。

秋野、風奈も黙って、翔助を見つめた。
すると…。

「じゃあな…」

翔助は、割れた窓の方に跳んだ。

「！？」

全員が、言葉を失った。

翔助が窓から、飛び降りた。

あっけなく…、静かに、窓から落ち、翔助の姿が消えた。

風奈は目を見開いて、その現実を見た。

秋野は、口を開き…。

「しよ、翔助君ーーーー！！！！」

思わず、目に涙を浮かべ叫ぶ。

クラス全員が、もはや言葉すら出ない。

気のせいかな、外が一瞬明るくなった。

（誰が、こんな下らねえことで死ねるか…）

「はははははは！！！！」

大声で笑うマークジャックに、皆視線変える。

その笑い声は、まさに絶望へのファンファーレのよう。

窓際に背を向け、教壇の上にまた腰を掛ける。

「わかったか！無力さのあまりに、狂うものを！！！」

唄うように、語り始めたマークジャックの背後から、物音がした。

「ははは！わかったか、己等の…」

喋っている途中、マークジャックは背後に違和感を感じた。
そして思わず、振り向くと…。

「お前、演説下手だな…。ガンダムのギレン・ザビ見習えや…」

マークジャックの後ろに、いつのまにか、全身の血管を浮き上がらせたゼイファーマンの姿が。

それには、マークジャックどころか、皆一斉に驚く。

「誰だ！貴様！」

「お前をぶん殴りたくて仕方ない、光の国からやってきたゼイファーマンです…。歯ア、食い縛れ！！」

血管を浮き上がらせた左腕を振り上げ、拳をマークジャックの顔面にヒットさせた。

バゴッ！

メリッ！と、顔面にめり込んだ拳の勢いがマークジャックの体を窓の外へと吹っ飛ばす。

「ぶはあ！！！」

マークジャックは、割れたガラスを更に割り散らし、体が鉄砲玉のように、三階の窓からグランドの地面へと飛ぶ。

そして…。

ドスン！！

激しい振動と砂埃を巻き上げ、グランドにマークジャックの体が左腕から落下した。

「ぐお！」

強靱な肉体であるから、致命にはならないが、その衝撃はマークジ

ヤツクの手にあつたマシンガンを破壊に至らせた。

顔面からは、ゼイファーマンに殴られた負傷後が残る。

「なんだ！あいつは！！」

壊れたマシンガンを投げ捨て、マークジャックは両足をグラウンドに着ける。

そして、自分が飛び出た三階の窓を眺めると、窓際にゼイファーマンが立っている。

.....

さつきまで煮え湯を飲まされていた翔助が、変身することが出来たのは三階から身を投げたときだ。

ちようど、三階から落下したことにより、皆の視線から離れた。

それにより、変身条件を満たす。

同時に、変身したことにより落下せず校舎の壁に付き、よじ登り、教室に入り込む。

まさに、劇的な登場とも言えよう。

.....

「うおおおおー！！！！！！」

ゼイファーマンは助走を付け、窓際から飛び出す。

グランドに立つマークジャックの元へと、飛び降りた。

それに、もちろんマークジャックは気付く。

「こっちに来るか!!」

強靱な手足の爪を構え、こちらに飛んでくるゼイファーマンに迎撃態勢を取る。

マークジャックが教室から離れたことにより、クラス全員がその場から立ち去る。

やっと、この絶望感から解き放たれ、生徒達に安堵の表情が浮かぶ。
だが…。

「翔助君は!？」

秋野だけは、ゼイファーマンが飛び去った後の教室に留まる。

ゼイファーマンの正体が、翔助なのを知るわけのない彼女には不安
が取り去ったわけではなかった。

秋野だけは、飛び降りた翔助のことを心配した。

そんな秋野の姿を、風奈はただ見ていた。

ドスン!!

ゼイファーマンが、マークジャックの目の前に立つ。

グランドの砂煙が、辺りに吹く。

西部劇の撃ち合いのような緊張感が流れる。

マークジャックは手を広げ、爪を見せびらかす。

そして、口を開いた。

「不意打ちとは言え、私に一発殴るとは…」

屈辱だったようで、根に持つような言い方をした。

「てめーみたいなチャカなしじゃ脅しもコケねえ、タマなしはムカ
ついて反吐が出る…」

メキ!メキ!と拳を鳴らしながら、ゼイファーマンは言う。
すると…。

サッ!

「!」

マークジャックは、素早い動きで右手の爪を弧を描くように振る。

その勢いは、空気を切り裂き、寸で気付き避けたゼイファーマン
の左頬を切り裂く。

「っ!!」

切られた頬から、血が吹き出る。

右手を振り終えたマークジャックは、続いて、左手を振る。

「！」

またも、寸で気付いたゼイファーマンに避けるが、右腕を切られた。まさに、手足が凶器そのものだ。

マークジャックの両手が、赤く染まる。

「どうした？ゼイファーマンとか言う、山猿君？」

見下すように、切られた右腕に手を当てるゼイファーマンに言い放つ。

「啖呵を切った割りには……」

マークジャックの口が、言葉を発している途中……。

バゴッ！！

「ぶっ！」

マークジャックの顔面に、ゼイファーマンの左拳が打ち込む。めり込まれた口から、血が出た。

「喧嘩の途中で……。偉そうに論してんじゃねえ！！」

鬼気迫る表情で、ゼイファーマンが叫ぶ。

「貴様ア！！」

また弧を描くように、マークジャックは爪を振る。

しかし、安易に避けられたため空を切った。

そして、何度も何度も、爪を左右で振る。

だが、すべてゼイファーマンに避けられる。

（当たらない！！）

マークジャックが、心の中で叫ぶ。

何故、当たらないのか……。

マークジャック本人は気付いてないようだが、スピードの割りには、手での弧を描く爪技の動きがすべて同じだったのだ。だから、爪技のコースさえ読めば避けるのは容易い。

バゴッ！！

今度は、ゼイファーマンの蹴りがマークジャックの腹に入る。

「ぐは！」

口から、血反吐を出す。

「この蹴りは、無関係なクラスの奴らを脅した分！！」

そう言いながら、ゼイファーマンは右腕を振り上げる。

怯んだマークジャックには、そのスピードに対する応答が遅れた。

「これは、貴様がヘナヘナにさせた男共の分！！」

思いつき握り締められた右拳で、マークジャックの左手を殴り付けた。

ボキボキ！と、左の手の骨と爪が割れる音が鳴る。

「ぎゃああああ！！！」

激痛に、マークジャックは叫ぶ。

ゼイファーマンの左手に、血管が激しく脈打つ。

「これは、貴様が泣かした女子の分！！」

左拳を、今度はマークジャックの右手に打つ。

爪が割れ砕ける。

「私の！私の美爪が！」

砕けた両手を、マークジャックは見て嘆く。

その間に、ゼイファーマンは右足の爪先をグラウンドに、トントンと叩く。

「最後に……」

「ひっ！」

さっきまでの余裕を持ったマークジャックの姿はない。

ゼイファーマンこと、翔助の頭に秋野の顔が浮かんだ…。

ゼイファーマンは、大きく素早く鋭く右足を固める。

「これは、貴様が秋野に銃を向けた分だあああー！……！！」
ゼイファーマンの渾身のハイキックが、マークジャックの顎に命中。
言葉話すことも出来ないほどの激痛、衝撃がマークジャックの意識
を消した。

顎が砕けてしまったのだ。

そして、彼の自信と誇りも…。

バダン！とマークジャックは、口から血を吹き上げ倒れた。

ゼイファーマンは黙って、マークジャックに背を向ける。

こんな彼の姿を見せたなら、きっと宇宙船で来る仲間も退くだろう。
だから、もうマークジャックの野望は消えた。

案の定、宇宙船らしき物は現われることなく、マークジャックは
警察に捕獲された。

……………

「翔助君！」

秋野は三階から階段を駆け降り、一階の翔助が落ちたらしい場所に
向かう。

果たして、無事であるだろうか…。

そう祈り、玄関に着くと…。

「おい、どこ行くんだ？」

変身を解除した翔助が、玄関で内履きを脱ぐ秋野に聞く。

「三階から落ちた翔助君探しに…」

脱いだ内履きを片手に、そう答える。

すると、違和感に気付いた。

「って！なんで、そこに！？」

探してた本人が目の前に居ることに、秋野は驚いた。

気付くのが、少し遅い…。

とりあえず、適当な理由を付けて無事だったと言い、彼女からの質

問攻めを流した。

「心配したんだからね……」

秋野が、さりげなく言うその一言が妙に心に染み込んだ。

………

第12話「風奈と葉月」

.....

地球と大気圏の狭間…。

正確には、地球と大気圏の境界線は曖昧だ。

しかし、そんな曖昧な位置に一つの円盤上の飛行物体が漂う。

この円盤の飛行物体の名は『バイリス』と言った。

このバイリスは、マークジャックが呼んだ仲間達の乗る宇宙船だ。

しかし、マークジャックがゼイファーマンにより敗北したことで、現われることはなかった。

だから、地球と大気圏の狭間に揺れる。

そして、宇宙船内から話し声が聞こえる。

「マークジャックは敗北した…」

「誰によつてだ…」

「わからぬ…」

複数の者の話し声だ。

「しかし、あの学園に居る何者かに敗北したのは確かだ…」

「あの天声高校は調べる必要がある…」

そう宇宙船内で会話が展開された。

これにより、奴らの標的は天声高校と定まる…。

果たして、この宇宙船に集う者達の狙いは…？

.....

あのバイリスに集う宇宙人達を追い詰めたゼイファーマンこと、名塚翔助は現在、学校で授業を受けている。

苦手な教科の（というか、すべて苦手）数学の時間、彼はノートに

落書きをしていた。

彼なりの授業の退屈しのぎだ。

すると、途中で手からシャーペンが滑り、床に落ちた。

そして、そのまま誰かの椅子へと転がる。

「やべっ…」

落ちたシャーペンを目で追うと…。

「ん…？」

シャーペンが、転がった先は、斜め前の風奈の席だった。

彼女の足元に、シャーペンが転がる。

翔助の顔が険しくなった。

前回の彼女の発言が、今だに許せないでいた。

風奈は、足元に転がる翔助のシャーペンを取ると…。

「これ、あんたの…」

嫌々そうに彼女は、シャーペンを翔助に向ける。

「さっさと返せ…。このアマ…」

青筋浮かせながら、翔助は言う。

すると…。

グサッ！

風奈が翔助の額に、シャーペンを投げ付け、額にシャーペンの先が刺さった。

ピューと血が出た。

「くおんの！クソアマ！！その制服剥いじまうぞ！！」

翔助は頭に来て、席から立ち上がり叫ぶ。

そして…。

………

急に立ち上がって叫んだことに怒った数学教師は、翔助に水を入れ

たバケツを持たせ、廊下に立たせる。

「ちきしょう……」

額にシャーペンが刺さったまま、廊下に立つ翔助の姿は滑稽だった。

………

終業のチャイムが校内に鳴り響く。

放課後になった。

玄関には、帰宅する多くの生徒達の中に、カバンを持つ風奈の姿もあった。

いつも委員会事で帰りが遅い彼女だが、今日は特に用事もなく普通に帰宅するようだ。

玄関を出た彼女の頭には、とあることが引つ掛かっていた。

それは、前回、変身に四苦八苦する翔助に言ったあの一言である。

彼女は言いすぎたと思ってはいるが、やはり、翔助の態度が気に入らない。

なんで、あんな奴がここに来たのか…、とすら思っている。

………

いつもの駐輪所に、翔助と多摩、そして、多摩の不良仲間である星球児、秋野の姿があった。

ちなみに、星は名前の割りには野球などやったことはない。

彼らは、自分達のバイクにキーを差し、暖機のためエンジンを回している。

冬だとエンジンは冷え、オイル類がよく潤滑せず、回転数が上がらないため、適当にアイドリングさせ、エンジンを暖める必要がある。いつものように、暖機中のゼファアのタンデムには秋野が座る。

暖機中のCB750に多摩は腰を置く。

「なっちゃん、額どうした？」

額に絆創膏を貼っているのに、気付いた。

「夏木に刺された…」

星のバイクであるヤマハ、SR400の暖機中のエンジンを見ながら答える。

それに対し、多摩は笑う。

「翔助君が、あんな言い方するからだよ」

秋野がそう言う。

いつのまにか、彼女はこの不良達に馴染んでいた。

「にしても、翔助君はいろいろな人から恨み買うよねー（イジメ集団をボコしたり）」

新参の星がそう言う。

「悪かったな…」

目をうつむかせ、ドヨンとした雰囲気を出しながら、翔助は言う。

「ごめん…、そんなつもりで言っただんじやないけど…」

新参の星は、空気が読めなかった。

そんな彼らの姿が、たまたま近くを歩いていた風奈の目に入った。

彼らの話題が、自分自身なのに彼女は気付いていない。

（バカの集まりか…）

そう思っ、風奈は彼らから目を離れた。

………

この地域は都心から近く、自宅から会社への通勤距離が短縮できるので、ベッドタウンとして多くの人々が住む。

そのためか、駅前には多くのマンションが立ち並び、駅は、いつも混雑が起きる。

そんな場所に、風奈の住むマンションがある。

それも、かなり豪華で高級な作りになっている。

カチャツ…。

マンションに着いた風奈が、真っ先にするのはドアに鍵を入れること。

そして、中に入ると、リビングのテーブルの上に現金の入った封筒が置かれてある。

彼女の家族は、両親共々、仕事をしており、家に居つくことは休日でもなかった。

風奈は、母親が自宅で料理作る姿を中学一年を最後に見なくなった。父親とは、週二のペースでしか会ってなく、会話は同じく中学一年を最後になくなった。

もう家族と言える状態ではない。

あの封筒の金も、要するに、晩食はこれでなんとかしろ、ということとでしかない。

「…」

彼女は金だけを抜き取り、封筒はクシャクシャにしてごみ箱に投げ捨てた。

封筒には、なんの言葉もない。

……………

ブオオオオーーー！！

空冷四気筒のマフラーが鳴り響きながら、通学路を駆け抜ける。

鳴らすのは、校舎から飛び出すように出てきたイエローカラーのゼファアー。

そのゼファアーのアクセルを握るのは、さつき、多摩達と離れた翔助。タンデムには、秋野が翔助の制服を握りながら乗る。

また、彼女の自宅まで送るように頼まれたのだ。

「近いんだから、歩いて帰れ!!」

アクセルを吹かしながら、翔助は後ろに居る秋野に向かって叫ぶ。

「えっ?なに、聞こえない」

翔助が取り付けたマフラーが、彼の叫び声をかき消すため、秋野の耳には届かない。

「お前って、意外に乳あるな……」

どうせ、マフラーが声をかき消すなら、わざと、さっきから己の背中にあたる感触を言ってみた。

すると、尻をつねられた。

「ぎゃあああー!!!」

何故か、この声だけは秋野に聞こえた。

.....

そんなこんなで、目的地に到着。

ゼファーは彼女の自宅前に止め、アイドリングをする。

秋野の自宅は、普通の一軒家。

和式で、庭には彼女の祖父の趣味が盆栽が並ぶ。

彼女の両親は至って普通の夫婦。

父は、『人生、こんなものか……』と思っているサラリーマン。

母は、おせっかい焼きで地獄耳といわれる専業主婦。

たぶん、秋野葉月という少女は母親似だ。

その母親似の葉月少女は、ゼファーのタンデムから降りた。

「送ってくれて、どうもー」

「尻痛いよ、バカ女……」

彼女からのお礼を、つねられた自分の尻を撫でながら、暴言で返すヤンキー・名塚翔助。

ガラッ！

葉月の自宅の玄関が開いた。

翔助、葉月は玄関に首を向ける。

すると、玄関から…。

「誰だあ！！」

そう叫びながら、上半身裸で、かなり筋肉質の老人が現われた。

「なっ！」

翔助はその異様な存在感を放つ老人を前に、鼻水を吹き出した。明らかに、老人とは思えない筋肉の高密度さ。

筋肉の発達による肌の美麗さ。

そして、168センチの翔助を越える185センチの身長。

その体躯に、翔助は一瞬『グラッ。ラー刃。』の世界に來たかと思つた。

「あっ！おじいちゃん！ただいまー」

葉月が、その老人をそう呼ぶ。

翔助は、素で吹き出す。

老人の名は、秋野松尾、65歳。

葉月の祖父でありながら、実践派空手の雄。

多くの空手大会優勝経験を持ち、この地区を巣食う暴走族、暴力団組織を素手で撲滅した等の数々の武勇伝を持つことから、別名『関東圏の桜花王』または、『関東圏の聖戦士』と呼ばれる。

彼と戦つて無事だったなは、後にも先にも、『関東圏の悪夢』と呼ばれた悪童だったそうな…。

その『関東圏の悪夢』である現在自営業を営む、K・Yはこう語る。
「マジで、ヤバかった…。死ぬかと思つた…。小説じゃなかったら、死んでた」

K・Y泣きながら、そう語る。

「誰だ！貴様は！？」

生ける伝説が、翔助に向かい叫ぶ。

その迫力に、翔助は思わず変身しそうだった。

「名塚翔助君。あたしの友達」

葉月が翔助を紹介すると、『関東圏の桜花王』は…。

「なに？このリーゼントが、葉月の友人と申すか！？」

また、叫ぶ。

「そーだよ」

笑顔で葉月が答える。

それに対し…。

「友達が多い方が良い…。だが！ヤンキーと付き合うのではない！
！」

いちいち大声なため、翔助は震えっぱなし。

（怖い…、恐すぎるよ、この爺さん…）

もう半泣きだ。

叫ばれるたびに、秋野松雄から、とてつもないオーラ力が放たれた。

残念だが、この状態のまま次回に続く…。

.....

第13話「サクラ・テンペスト」

.....

葉月の家には信じられないほどのオーラを秘めた祖父、秋野松雄が居た。

その祖父に気に入られていないため、尿を漏らしてしまった翔助は、このままボコボコにされてしまうのか！？

果たして、今回明らかになる秋野松雄の策略とは！？

力とは、未来のために奮うものだ！！

.....

「漏らしてねえよ！！」

秋野家の玄関前で、翔助は意味不明に叫ぶ。

叫んだ理由は自分でも解らないが、尿の代わりに汗だくだ。

「なにを、漏らしてないだと！？」

筋肉質で屈強な葉月祖父、松尾が太く色気のある大人の叫び声で返す。

「えっ？なんでもないです！！」

全身硬直させ、翔助は答える。

硬直した体のすべての毛穴から、汗が吹き出しているのが解った。

このままでは、この爺さんにSATHUGAIされてしまう…。

そんな考えに支配され、恐怖で金縛り状態の翔助を救うがごとく、葉月が口を出す。

「おじいちゃん、やめてよ！翔助君は、おじいちゃんが嫌いなヤンキーじゃないよー！！」

その言葉一つが、翔助にとっての救いだ。

「なら、そのリーゼントはなんだ!？」

秋野松雄が、葉月に問うと…。

「彼は氣○團のファンだから、真似してるだけなの」

翔助の髪型に指を差し、葉月は言う。

(ええええええー！！！！！！)

無理のある誤魔化し方に、翔助は目を点にして、心の中で叫ぶ。
なに、その誤魔化し方？

と、叫ぶことも出来ない。

このまま、秋野松雄に睨まれるのか……
と思ったとき。

「そういふことは、早く言え…」

秋野松雄が、初めて静かに声を出す。

誤魔化しに成功した。

(ええええええええー！！！！！！！！！！？？？)

またもや、心の中で叫ぶ。

なんで、ヤンキーは駄目で、氣○團はOKなのか。

そんなことを考えれば考えるとカオスになるので、考えるのを止めた。

ただ翔助は、去年の紅白での例の裸が偽物だったのにムカついて、
ホテイスーツ

.....

とりあえず、翔助は秋野家に上がった。

秋野家の室内は、日本情緒溢れる木々で出来た空間。

自分が日本人であることを思い出させるがごとくに、香る緑茶の匂いがする廊下。

その和風空間の秋野家の角にあるのは、長女・葉月の個室。

彼女の部屋は、やはり畳が敷かれた和室であるが、やはり女の子らしい部屋の作り。

現在、翔助はそんな葉月の部屋に居る。

「翔助君、汗だくだよ…」

やっと秋野松雄から離れられ気が抜け腰を下ろす翔助に、葉月も腰を下ろし話し掛ける。

「おまえの爺さん、今まで、何人殺った？」

思わず、物騒な質問をする。

「なに、言ってるの…」

そう言いたくなる気持ちは、葉月には解らなくはない。

そして、葉月はふと立ち上がり戸を開ける。

「ちよつと、タオルとお茶でも持ってくるね」

そう言い、彼女は部屋から出て行った。

シャー、と戸が閉まった。

「ふー！」

急に気の抜けた翔助は、そのまま部屋に仰向けになる。

とりあえず、なんて恐ろしい爺さんが居る家なんだ…、と思いながら、翔助は葉月の部屋でゴロゴロする。

すると…。

「ん？」

ふと、タンスに目が行った。

家が和室とは言え、タンスは現在風でオシャレな感じ。

葉月の衣類を収納しているようだ。

すると、翔助の頭がDOHCのごとく回転しはじめた。

（タンス↓服↓下着↓葉月の下着↓ドスコイ！）

翔助は、その場から立ち上がった。

「あのタンスの中には…」

思わず、唾を飲む。

あのタンスの中には翔助が見たことも、脱がせたこともない女性の聖衣がある。

だから、体が無意識にタンスの元へと駆け抜ける。

「パンティや、ブラが…、ここに…、あると言うのか!？」

タンスを目の前にして、叫んだ。

急に翔助の脳裏に、あることが浮かんだ。

.....

それは、翔助が去年まで入っていた25人の暴走族チーム『NAN AJIN』に居た夏のある日。

ちなみに、そのチームはリーダーが無免許運転で捕まって解散した。

「名塚さん!」

一人のさらしを巻いた幼顔のチームの新入りが、翔助に近づく。

この頃の翔助は、ゼファー400を愛車に鬼人のごとく暴れたことから、チーム内では『そよ風の暴れん坊將軍・名塚』と呼ばれていた。

ちなみに、この頃、ゼファー400に乗ってるのは10人くらい居た。

「なんだ…」

クールにタバコに火を点けながら、新入りの方を向く。

すると…。

「昨日、女と寝たんですが…」

「ぶっ!」

翔助はタバコを吹いた。

いきなり、新入りが女性経験を語り出したので動揺した。

チーム内で、女性経験がないのは翔助だけ。

しかし、そのことをチーム内の誰にも言わなかった。

「そんな時の俺の女の下着、凄かったんですよ…」

変なことを、新入りは言い始めた。

「どんなん…」

多少興奮しながら、翔助は聞く。

すると、新入りは自分の彼女の下着について語りだし、それに対し翔助は真剣に耳を傾ける。

（女の子って、そんなHな下着を着ているのか！？）

それ以来、翔助は女性の下着について、真剣に考えるようになった。たかが下着、されど下着。

女性の下着は、まさに黄金聖衣。ゴールドクロス

そう翔助は思った。

………

そんな憧れの下着が、今は目の前のダンスの中にある。

翔助のレーションが上がっていく。

あまりの自分の女運のなさから、下着を拝むのは、ドラ○ンボールを七つ集めない限り無理だと思って泣いた日々の自分の姿が流れる。だが、そんな昨日まで自分との別れのときが来た。

「うう…」

思わず、涙がこぼれた。

そして、ダンスに手を掛けると…。

「名塚翔助、開けまーす！！」

そう叫びながら、ダンスを引こうとした、その時…。

「……」

翔助は背後から、とてつもないオーラの力を感じた。そのせいで、ダンスを開けようとする手が止まる。

「……」

翔助は背後から来る圧力からか、汗が流れはじめた。
この感覚は…。
恐る恐る振り返ると…。

「貴様がぁ！葉月の部屋になにをしている！！！」

いつのまにか、なぜか部屋に秋野松雄が居た。

「ぎゃああああああああああ！！！！！！！」

翔助は叫びながら、タンスから凄い勢いで離れる。

そして、部屋の窓側に避難した。

秋野松雄の形相が、徐々に変貌してゆく。

「大事なぁ！孫娘の葉月の部屋に入って、なにをしようとしたぁあ
ああ！！？」

「待つてください！誤解です！！」

「ここはぁ！一階建てだぁぁ！！」

「それは、五階…」

どうやら、秋野松雄はたまたま葉月の部屋の前を通り入ってみると、
タンスを開けようとしている翔助を発見してしまったのだ。

大事な孫娘の部屋で、奇行をしようとしている翔助に、秋野松雄の
怒りは膨張する。

「なんもしてねえーって！！しっけーぞー！じじい！！」

逆ギレした翔助は避難した窓側から、なにかを無意識に握りながら
反論。

だが…。

「貴様のその手にあるのは、なんだぁ！？」

「へっ？」

無意識に握ったものを、翔助は目視した。

無意識に握った、それは…。

「パンティ…」

水色で三角の形をした可愛らしい葉月の下着だった。

窓側に干されていた下着を、肉体が無意識に握ってしまったのだ。

「…」

翔助は葉月の下着を握ったまま、放心状態になった。

憧れの下着を握ることが出来た喜び。

これから、『関東圏の桜花王』に殴られる苦痛と悲しみ。

そのすべてを、下着と共に握り締めた。

この日、秋野家に大きな音が響く。

……………

日が暮れ、顔面を腫れ上がせ泣きながら翔助はゼファーを引き、秋野家を後にする。

「うう…」

滝のように、涙を流していた。

よほど、すごいことをされたようだ。

全身ボロボロの翔助の目の前に、一つの影が。

「はは！私は…」

なんと、いきなり宇宙人が出現した。

果たして宇宙人の正体は！？

カッ！

自己紹介する前の宇宙人に対して、翔助はゼイファーマンに変身して、殺し屋1のように泣きながら、名知らぬ宇宙人を殴り飛ばした。

.....

第14話「物心の悪意」

.....

まだ桜も咲いていない季節。

冬が去ろうとしているが、まだ肌寒い空気だ。

そんな季節が変わろうとしている時期に、また一つの事件が起きようとしていた。

.....

「知ってる？」

「なにを？」

「人さらいタクシー……」

「ああ、知ってる……」

「この近くで起きてるんだろ……」

「気持ち悪いよね……」

「。。。君のお父さんも、失踪しちゃったらしいわよ……」

このような話し声が、天声学園中から聞こえた。

話題になっているのは、この地域で起きている行方不明者の増加という事態についてだ。

このことは、連日テレビでも取り上げられ、この地域の人々に恐怖を与えた。

行方不明になっている対象は、サラリーマン、OLや、学生など。被害者すべてに共通するのが、朝から仕事に行き、職場に姿はあったことから、帰宅中に失踪したとのことだ。

そこから、一つの噂が生まれた。

『人さらいタクシー』と……。

その噂の内容は、夕暮れ、帰宅中の人間の近付き、そのタクシーに人が乗った瞬間、異様な叫び声がタクシーの中から聞こえ、いつのまにか、タクシーは消えてなくなり、翌日、そのタクシーに乗った者は、朝の新聞に載ることとなった…。

この噂は、一人の通行人が、上記の状況を実際に目撃したことから、広まって行った。

それ以来、タクシー会社の仕事は減り、悪質なデタラメとも思われたが、日を重ねることに目撃者と、失踪者が増え、より噂は現実的に認知されていった。

『人さらいタクシー』は、今だに、目的、原因などが謎のまま失踪者を増やし続ける…。

………

そんな噂が立つ平日の夕方。

放課後になり、生徒達は部活動をしているか、帰宅をしているかだった。

グラウンドからは、野球部の掛け声が聞こえる。

そんな部活動で賑わう中、クラス委員の仕事を終えた風奈が帰宅しようとしていた。

「……」

帰っても、札束の封筒しかない自宅のマンションにだ。

彼女はため息をついた。

………

夕暮れになり、陽が暮れた。

彼女が歩く帰宅路も、黒い影に染まる。

あまり人が歩かない通りだったので、黒い影が大きくなると不気味

だ。

だが、風奈はそんな薄暗さには慣れていたので、不気味には感じない。

しかし、今日だけは違った。

いつもの突き当たりの丁路地を抜けると…。

「…！」

風奈は驚いた。

目の前に、タクシーが。

「えっ！」

古ボケた四角い形の白いタクシーが、彼女の目の前に対して後部座席のドアを向けている。

たまに、車を通るくらいでしかない狭い路地にタクシーがあるとは…。

それに、さっきまで車の音など、全然聞こえてはいなかった。

「なに？」

風奈の脳裏に、ある言葉が浮かぶ。

『人さらいタクシー』…。

学校中で広まっていて、くだらないと思っていた噂が…。

ガチャッ！！

目の前の後部座席のドアが、いきなり開いた。

………

「やつべ…」

見知らぬ道を、翔助はゼファーを引きながら歩く。

ここ、どこだ？を連呼しながら、自分の歩く道を見渡す。

翔助が、この道に入っただのは、愛車ゼファ―を学校帰りに走らせていたら、急に、キャブレターが不調を起こしてしまい、気付いたら、見知らぬ場所を歩くはめに。

とりあえず、バイク屋を見つけて、修理をしてもらおうと歩く。

だが、歩けば歩くほど、道が解らなくなった。

「あー！どこだ、ここは！イラついて、反吐が出るぜ！！」
と、嘆いた時…。

「きゃあああー！！！」

！？

悲鳴が響いた。

翔助は、悲鳴がなった方に首を向ける。

彼には、いつも自分に説教してくる生意気な風奈の声だと解った。

「なんだ！？」

ゼファ―のサイドスタンドを立たせ、その場に駐車させ、ハンドルから手を離す。

そして、声が響いた方向に体を走らせた。
すると…。

カツ！！

大きな光が、体から放たれる。

この光は、翔助の体をゼイファーマンへと変身させた。

宇宙人が現われたとき、身に危機が迫ったときに変身可能。
しかし、変身しながら、妙な空気を、翔助は感じた。

………

開いたタクシーのドアから、うねうねとした触手が伸びる。

蛇のように飛び出した三、四本の触手は、風奈の四肢に巻き付く。

「なによ！」

手足に絡み付く触手は、風奈の体をドアの方へと引き込む。

このように触手を絡ませて、タクシーは多くの人々をさらっていたようだ。

「う……」

触手は、更に強く締め付ける。

その圧迫感に風奈の意識は、遠退く。

そして、あと少しでタクシーに引き込まれそうになった時…。

タッタッタツ！！

大地を蹴り、駆け抜ける音が響く。

とても強い足音のようだ。この激しい足音は、意識が遠退いた風奈の耳には入る。

だが、彼女の意識を触手の締め付け強さが奪う。

「誰が…」

風奈の意識は薄れた。

「貴様があああー！！！！」

激しく足音を鳴らし、その場に現れたのは、ゼイファーマン。

風奈の締め付けられ、力尽きた姿が網膜に焼き付いた。

「変態タクシーが！！！！」

タクシーから放たれた気色の悪い触手が彼女を引きずり込もうとした時…。

タクシーの元へ駆けながら、ゼイファーマンは大きく右腕を振りかぶる。

振りかぶった右手に、血管が激しく浮き上がった。

右手を刀のように反らし、手刀を作り上げ、思いつきり動かす。

「今作った必殺技！！ナナハン・チョップ！！」

ゼイファーマンがそう叫び、触手を狙って手刀を振る。

ブン！！

手刀は、大きく空気を切り裂きながら、彼女の体に巻き付いた触手を斬る。

ブチッ！ブチッ！ブチッ！ブチッ！

妙な音を鳴らしながら、触手は切断された。

気持ちの悪い緑の液体を、断面から流し、風奈の制服に飛び散る。

手刀は勢い余って、彼女の制服の上着をも裂いた。

そこから、肌が覗く。

（ウホッ！）

ゼイファーマンは、不可抗力だが喜ぶ。

だが、そんな喜びを冷ますかのごとく…。

グオオオオーーン！！！！

激しい回転音が、ゼイファーマンの耳に入る。

例のタクシーから、エンジンが鳴り響く。

そのエンジン音に、ゼイファーマンは、再びタクシーの方に首を向ける。

「なんなんだ…。このタクシーはよ…」

気味の悪い緑の液体を吐き出しながら、タクシーから飛び出した触手はビクンビクンと脈を打つ。

触手が飛び出た室内は、黒く大きな闇が影により見えない。

ゼイファーマンが来たのは、ちょうど風奈が締め付けられた所からだ。

そのせいか、ある考えが頭に浮かぶ。

（えっ…、SMタクシー…。そげな…）

ゼイファーマンの意識は、あくまで万年発情期、名塚翔助。

そんな卑猥な考えが浮かびながらも、ゼイファーマンの目がタクシ
ーの運転席に向いた。

すると、ある事実気付く。

「!!!」

運転席には、誰の姿もない。

人の気配も、生物の気配すらない。

このタクシーは無人で動き、そして、触手を放ったり、エンジンが
勝手に始動した。

さすがに、ゼイファーマンは妙な気持ち悪さを感じた。

「なんだ…、こいつ…」

そう言いながら、左腕を振りかぶる。

あまりの不自然さに、とりあえず殴ることにした。

狙うのは、タクシーのエンジンルーム。

ゼイファーマンの力なら、一撃でエンジンを破壊できる。

だから、エンジンルームを狙い拳を放つ。

ドン!!

放たれた拳は、タクシーの外装を突き破り、エンジンに衝撃を与え
た。

ゼイファーマンの左拳に、手応えがある。

確実に、エンジンを破壊した。

ブスン!!

鈍い音を放って、大きな黒煙がエンジンルームから、狼煙のように
上がった。

黒煙が、ゼイファーマン、風奈の居る周囲を包み込む。

ブス…、ブス…。

と、タクシーから異音が響く。

完全に、エンジンが止まり、タクシーはただの鉄の固まりになった。

これが、無人の人さらいタクシーの最期の光景。

「……」

ゼイファーマンは、気を失った風奈を抱き抱えながら、タクシーの黒煙を睨んだ。

彼女を、早く病院に連れていかねばと思うと同時に、黒煙がゼイファーマンの目に強く染みた。

もう動かなくなったタクシーは、ただの廃車。
動くことはない。

………

後日…。

行方不明者達は、何事もなかったように自宅、職場へと帰ってきた。タクシーに引きずり込まれた以外、彼らはなにも覚えては無かったそうだ。

そして、とある某所にて、古い形式のタクシーが、エンジンが大破された状態で発見される。

タクシーは、15年間この地で走り続けた物だが、つい最近、廃車処理された物だったそうだ。

このことが、今回の事件と何の関与があるかを、警察は調査中。
人さらいタクシーの謎は、謎のまま終演となる。

そんな内容のニュースが、つけっ放しにされたテレビから流れ、一人部屋の病室に横たわる風奈は耳に入れた。

「寂しかったんだよ……」

独り言を呟く。

彼女の体に、怪我などはない。

しかし、彼女の病室に友人が来ても、両親が来ることはなかった。

.....

第15話「冬、春が入り混じる三月の報せ」

.....

謎の宇宙船『バイリス』に乗る宇宙人達にとって、ゼイファーマンは新たな驚異になりかねなかった。

彼らの野望は、我が星の文明発達のために地球人を手に入れることだ。

その野望の際には、ゼイファーマンは邪魔になる。

だから、彼らはある強行を放つことにした…。

.....

気付けば、もうとつくに春休み。

しかし、たまに授業を受けないでいた翔助は補習を受けなければならぬ。

かつたるいと言いながら、翔助は大きくアクビをし、一人朝早く学校の玄関に向かう。

「進級できねえとは言え、休みまで学校来ねえといけねえのかよ…」愚痴を吐きながら、ダラダラと歩き、玄関に入る。

やはり、春休み中の校内は、静けさしかない。

翔助は内履きに履きかえ、ひんやりとした寂しい感じの廊下を歩く。窓を見ると、咲き乱れそうな桜の木がチラホラ見え、もうすぐ春なんだと感じさせた。

そう思いながら、翔助は歩いていると…。

（俺の春はいつだろうな…）

急に、そんな切ないことを考え始めた。

（大体、高校に入り直したというのに、ろくな出会いがなんやんけ…）

翔助は、この学校に来てからを思い浮べる。

葉月とは、気付いたら、いつも喋ってる仲で、油断あれば襲ってやりたいタイプではあるが、あの恐ろしい祖父が居るのが…。

風奈は、有無を言わずに襲ってやりたいタイプだが、性格がキツイので関わりたくない。

思えば、バイトの依頼で出会った年上の春野カイリが、一番襲ってやりたいタイプだったが、あれ以来、逢っていない…。

自分の春の予感のなさに、翔助はため息を吐く。

（今年も、寂しい夜を過ごさなあかんのか…）
そう嘆くと…。

「ゴホッ！ゴホッ！」

「ん…」

自分の背後から、咳き込む声が聞こえた。

どうやら、校内には、もう一人誰か居るようだ。

声の方に、翔助が振り返ると…。

！？

翔助は、目を疑った。

振り返ると、背後には黒い長髪の肌の白い日本人的美人なか細い少女の姿が。

「ウホッ…」

翔助は思わず、視線が彼女に奪われた。

（なんだ…、このすぐにでも、襲いたくなるような線の細さと美しさは…）

襲うが真っ先に出ながらも、翔助は彼女の美しさに見惚れる。

今まで、一目見て惚れることはない翔助には、これが初めてということになる。

まさしく、一目惚れという奴だ。

「ゴホッ！」

その少女は、苦しそうに口に手を当てて咳き込んでいる。すると、翔助は暴走したかのごとく駆け寄り…。

「大丈夫ですか！！」

すぐ様、声を掛けた。

「えっ…」

いきなり、目の前に現れたリーゼントに彼女は驚き、足が止まる。

そんな様子も、気にせずに…。

「体調悪いの？だったら、保健室行こう！行つて、ベッドの上で…」
「もはや、本能だけで翔助は口から次々と言葉を放ち続ける。

いつものパターンなら、ウザがわれるシーンであるが…。

すると、彼女は口を開き…。

「ゴホッ…。どなたか、存じませんが、親切にありがとうございます
す…」

「えっ…」

ナンパのつもりで声を掛けたはずだが、丁寧に礼を言われた。

これには、翔助は調子が狂う。

「では、失礼します…」

ペコッ…、と頭を下げ、彼女はゆったりと、また歩き始めた。

「あつ、はい…。お気をつけて…」

彼女に合わせて、翔助も頭を下げる。

今まで逢ったことのないタイプだったので、ペースを完全に彼女に飲み込まれた。

……………

補習は終わり、翔助は学校から出て、すぐ様、多摩達と遊ぶことにした。

そして、彼らの溜り場である喫茶店『コーヒーショップ・奈良』に、

翔助はゼファーに乗って来た。

ガラガラ…、と店のドアを開けて、翔助は入る。

「おう」

軽く挨拶をして、テーブル六つとカウンターだけの店内に入ると、春休みモードの多摩、星、スキンヘッドの私利鳥^{しりとりじょう}丈の三人が居た。

「あつ、なっちゃん」

「ちいーす」

彼らも、軽く挨拶を返す。

翔助は、彼らが座る席に腰を掛け、テーブルにゼファーの鍵を置く。
「マスター、コーヒーで、マックスモード（砂糖、ミルクを信じられないくらい入れた状態）ね」

そう注文をした。

翔助は、激甘じゃないとコーヒーが飲めない。

「あれ、秋野は？」

いつも、葉月と一緒に居たので、多摩がそう聞いてきた。

「知るか…、あんな俺をボコボコにしたジジイの孫なんか…」

苦い顔をして、翔助は答える。

前々回、葉月の下着を無意識で握り、秋野松尾の怒りに触れて以来、変なトラウマが出来たせいか、会いづらくなった。

「そうだ！今日は、すげえマブな子が学校に居たぜ！」

思い出したように、翔助は話し始めた。

「また、女の話かよ…」

星は呆れて言う。

こないだも、翔助に長時間、自分に彼女が出来ない理由について話されたから嫌がっていた。

「女なんか、つまらないわよ。なっちゃん」

オカマ口調の私利鳥が言う。

彼は、何故かオカマぽい。

理由は不明だが、オカマぽい。

そのうち、尻に穴を開けられそんな恐怖感を翔助は感じていた。

「まあ、聞けや。学校に、肌が雪みたいに白くて、黒髪の似合う……」

彼女の特徴を言う翔助の話に、多摩は反応した。

「もしかして、変に丁寧語で、体が病弱な感じの!？」

「えっ……」

自分が言い終わる前に、多摩が言い当てたので、翔助は驚く。

「知ってんの……？」

「……」

聞き返されたが、多摩は黙り込み、急に立ち上がる。

「学校に居たんだよな!」

多摩は焦るように、翔助に聞く。

いつもと、様子が違っていた。

「ああ……学校にな……」

翔助が、そう答えると、多摩は席から離れ、店のドアに向かい走り始めた。

啞然とする三人を尻目に、多摩は店から出ていく。

「おい!」

よく解らないまま、立ち去る彼の背中を翔助は見つめるしか出来なかった。

ブオオオオーーン!!!!

店の外に駐車されていたブルーカラーのCB750のマフラーが響く。

エンジンが始動したばかりのCB750に、多摩はまたがる。

（あいつ、まだ学校辞めてなかったのか……）

心の中で、そう言いながら、CB750を走らせた。

「なんや、あいつ……」

翔助は、ポーカーとした。

店内では、啞然とした三人が。

いつもクールな態度の多摩が、急に取り乱すので驚くのも無理はない。

「あんな多摩ちゃん、初めてよ」

私利鳥が、オカマ口調で驚く。

どうやら、誰一人として、多摩が取り乱す理由は解らなかった。そんなとき…。

「ふふふ…、見せてもらったぞ…」

「!？」

いきなり、誰かが話に割り込んできた。

声の方に、三人が振り返ると、そこにはコーヒーを持ったモヒカンので筋肉質の巨漢が。

その男は、この店のマスター、日高良司。

なぜか、いつもレーザーを着た謎の多い男。

彼の手には、翔助が頼んだコーヒーが。

「マスター。なんで、多摩の奴、様子が変なんです？」

星が聞く。

すると、マスターは翔助の前にコーヒーを置き、静かに微笑む。どうやら、マスターは多摩について、なにか知っているようだ。

「知らない」

マスターは、一言で切り捨てた。

(だよね…)

三人同時に、そう思った。

……………

しばらくして、翔助は店から出て、ゼファーにまたがりエンジンを始動させる。

後を追うように、星、私利鳥も店から出る。

「なっちゃん、追う気？」

私利鳥が、翔助にそう聞く。

「ああ。なんか、わからんが…、たぶん…」

ゼファーのエンジンを吹かしながら、翔助は多摩が取り乱す理由（推測）を語り始めた。

「あいつは、俺が色が白い、黒髪の似合うとの特徴を言い出すと、すぐに反応した…。それから、察するに…、多摩の奴は、昔買ったデラ。っぴんに、ちょうど、そんな感じの子が載ってたのを思い出し、ムラムラし、ビデオ屋に駆け込ん…」

気付いたら、星、私利鳥の姿が消えていた。

跡形もなく、極めて、気付かないうちに居なくなった。

「…」

翔助は、もう何も言えなかった。

……………

「ゴホッ…」

補習が終わった、例の彼女は咳き込みながら、学校の廊下を歩く。

やはり、まだ咳き込んでいる。

どうやら、とても体が弱いようだ。

そんな彼女の背後に…。

ザッ！

妙な一つの影が走る。

……………

学校へ向かう道路を、多摩のCB750が飛ばす。

アクセルを握る多摩は、なにかを思いながら、駆け抜ける。

（ユキハ…）

.....

エンジンが暖まり、マフラー音が快調になったゼファーに、翔助はローギアを入れる。

「よし、行くぜえ！爆風号（ゼファーに付けた名前）！！！」
いざ、発進しようとした時。

「あつ！名塚君！！」

急に、翔助は背後から名前を呼ばれた。

その声は、どこかで聞いた女性の声。

「えっ！」

せつかく、暖めたゼファーのエンジンを切った。

そして、翔助は声の方に振り返る。

すると…。

「久しぶり…」

「カイリすあーん！！」

なんと、翔助の背後には、憧れのおとなしい感じの眼鏡の女子大生、春野カイリが…。

.....

第16話「全部、嘘さ。そんなもんさ、春の女は幻」

.....

多摩巨人、17歳は特に家庭内が荒んでるわけでもなく、鬱屈するタイプではない。

彼が、不良になったのは、親が元ヤンだった流れからだ。普段から、明るく頼れる性格だったので、小、中学、高校と彼の周りには友人がいつも居る。

誰からも好かれ、リーダーシップのある男だった。

そんな彼の小学五年になった、ある日...

昼下がりの体育の時間、グラウンドで、数名ごとのチームを作つてのサッカーをしていた。

その際に、彼は足を躓き転び怪我を負う。

軽傷だったが、一応、保健室に一人で行き、怪我を見てもらうことにした。

そこで、彼はある少女と出会う...

多摩は、保健室に入る。

だが、室内に保健の先生は居ない。

どうやら、ちょうど、その場から離れていたようだ。

先生が居ないことに気付いた多摩少年が、保健室から出ようとする...

「ゴホッ...」

カーテンで隠されたベットから、咳が聞こえた。

どうやら、誰か居るようだ。

咳が聞こえた方のカーテンに、多摩少年は向かう。

誰が居るのだろう...、そう思いながらカーテンに手を掛けた。

そして、カーテンを開けると…。

「…！」

幼い多摩少年の目には、カーテンの向こうに居るベッドに横たわる色白い黒髪の少女が目に入った。

そして、彼女を見たまま黙り込む。

今まで、異性など意識したことも、感じたこともなかった多摩は、その彼女に見惚れてしまった。

「…！」

少女の方も、いきなり現れた多摩に驚く。

二人は、そのまま黙り込んで、互いを見つめる。

これが、多摩にとって忘れることの出来ない女性との出会いだった。

彼女の名は、冬海ユキハ。

昔から、体が弱く体調を崩しやすい少女。

学校に来て、途中で保健室に行ってしまうため、人との接点が薄い。

彼女を知っているのは、ごく一部の児童と教師のみ。

だから、多摩は彼女のことを知らなかった。

こんな運命じみた出来事を、キツカケに、二人は仲良くなる。

多摩は、休み時間にでも、つまらなく下品な内容の話をしに、友達と遊ぶのをスッポかし、よく彼女に会いに行く。

ユキハ少女も、笑いながら、その彼が話に来るのを毎日、保健室のベッドの上で楽しみにしていた。

幼い恋人同士であったが、中学は別々になり、二人は別れることとなった。

携帯電話で連絡を取り合ったり、互いの自宅の住所を知らない、二人には永遠の別れにも思える。

卒業式の帰り際、多摩は彼女に…。

「俺、大人になったら、お前を俺の嫁さんにしてやるよ」

彼なり、本気で言ったプロポーズだった。

それに対し、彼女は…。

「うん」

たった一声、頷く。

こうして、二人は互いの将来を幼いながらに誓い合う。

月日は流れた…。

その歳月は、二人を取り巻く環境を変える。

中学時代、ふと教師との口論をキツカケに多摩は、もともと素質や要素があつたとはいえ、不良、問題児として顔を広げ、学校内の生徒、周囲の不良、近所の人々から恐れらる存在となり、警察からもブラックリスト入りに。

そのことが、二人の関係を壊すこととなる。

何故なら、ユキハの父は警官だった。

彼女の父は、何度も、街中で問題を起こした多摩を取り押さえたりした。

その際、彼から暴行を受け、多大な迷惑を被っている。

彼女の父と、多摩は互いに目の敵にし合う。

だが、ある時、多摩はユキハの父が、その憎き警官だったのを知る日があつた…。

彼は、初めて自分のしてきたことの愚かさを知る。

自分が、惚れた少女を生んだ親に暴拳をしていていたということに…。

15歳になった二人は、偶然、同じ高校に入学。
数年ぶりの再会を果たすこととなる。

だが、彼はユキハに逢うことをしない。

彼女の親に対する罵詈雑言や、暴拳への罪悪感があり、逢うことなど、とても出来ない。

もしかしたら、恨まれているかもしれない。

そう考えると、怖くて仕方なかった。

だから、彼は彼女を避けるように学校生活を過ごしていた。

ユキハの方は、やはり、体が弱いためか学校で見る回数は少なく、いつのまにか、彼女を学校内で見ることが保健室ですらなくなる。

噂では、彼女が学校を辞めた流れ、多摩は彼女に逢うことは、もう二度とないと一人諦めた。

しかし、人は逢えなくなると思うと、より一目でいいから逢いたいという気持ちが強くなるものであり、多摩は心の中で彼女に対し、くすぶったままで居続ける。

翔助が、みつけるまでは…。

彼女の親に申し訳ない気持ちがあり、ユキハに逢うことをしなかった。

しかし、多摩は彼女の気持ちを知らない。

彼が父に迷惑を掛けたことを恨んでいるのか、それとも、今の自分と同じように逢いたがっているのか、あるいは忘れてしまったのかとにかく、彼は彼女の気持ちを知りに走る。

………

キキイイ!!

多摩のCB750が、学校の駐輪所の前で急ブレーキをかけた。

制動でタイヤから、砂埃が舞う。またがりながら、左足でサイドスタンドを蹴りつつ、バイクから降り、地に足を着ける。

そして、そのまま多摩は学校へと向かった。

………

（なぜ、カイリさんが…）

一方では、翔助が新たな局面を喫茶・奈良の駐車所で迎えた。
なんと、自分の憧れの女性であった春野カイリが目の前に居るのだ。
始動させたエンジンを、すぐ切り、翔助はゼファーから降りる。

「久しぶりね…。あの時は、ありがとう…」

彼女がそう言う。

前回はストーカーのせいで、思い詰めた表情をしていたが、今は明るく可愛らしい。

そんな彼女の笑顔に、翔助は…。

（かつ、カワイイ…）

襲いたいとは思わず、純粹に彼女に見惚れる。

性欲が純粹な気持ちに負けた瞬間だった。

ちなみに、もう多摩を追い掛けることは一瞬で忘れた。

……………

タッタッタツ！

人気のない校内を、多摩は走る。

校内には補習を受けている者、部活動をしている者などが、多少居るが、彼の探している色白の冬海ユキハと言う名の少女の姿は見えない。

もう帰ってしまったのだろうか？

多摩の脳裏には、そんなことが浮かぶ。

自分が今更、逢いたいというのは勝手すぎるのは解ってはいる。

しかし、今のようないかに逢いたいのに逢えない気持ちは辛過ぎる。

……………

「カイリさん…。あの…」

「ん？」

喫茶・奈良の前に、翔助、カイリは立つ。
いつになく、彼は真剣な表情をする。

第三話で出会って以来から、翔助は彼女のことを想っていた。
出会ったあの日から、彼の脳内結婚したい女性ランキングトップを
キープしているカイリ。

そんな彼女に、ある一言を言おうとしていた。

その一言は、希望への階段への一歩となりうる問い…。

そして、翔助は口を開く。

「今、彼氏居ますか？」

再会して、すぐなのに、そんなことを聞いた。

それには、彼女は戸惑う。

「…」

「いきなり、こんな質問してごめん…」

今回は、いつもと違う翔助は謝る。

だが、気になっていた。

ストーカー事件で、暗くなっていたカイリ。

そんな彼女を慰めてやりたい…、と下心なし（なしとは言いきれな
いが）で想っていた翔助。

カイリが、彼氏は居ないといえば、自分が彼氏になって、彼女をず
っと守ってあげたい。

それが、翔助の考えであり、願望。

しばらくして、戸惑っていたカイリの口が開く…。

「うん、居るよ」

ザ・ワールド（翔助の時間が止まった）

かなりの明るい笑顔で言い放つ。

居ると答えるのは、予想中最悪の事態。

翔助はゼットンに破れたウ。トラマンのように、立ったまま動かな
くなり、脳裏に、『水の星に愛をこめて』が流れる。

名塚翔助、18歳。

フラれたショックで、再起不能。

だが、運命は残酷にも、彼に戦いを強いらせる。

.....

第17話「悪とは無差別なり」

.....

前回までの話。

謎の美少女、冬海ユキハの正体は、多摩の小学校からのガールフレンドだった。

しかし、多摩は事情があつて逢えなかったが、今更になつて逢いたいと騒ぎだし、学校へ向かう。

だが、ユキハに謎の影が近づく。

そんな状況の最中、翔助はカイリに彼氏が居ることを知り、精神的コロニー落としを受け、自我崩壊寸前。

果たして、多摩はユキハに逢うことが出来るのか！

ユキハに迫る影の正体とは！？

なぜ、人々は今更になつて徹底的に納豆ダイエツト捏造問題を叩き始めるのか！？

言つておくが、翔助はもうクライマックスだぜ！

.....

「うん、居るよ」

カイリが、その台詞を言い放つてから数分後…。

喫茶・奈良の前には、用事があるカイリは去り、固まったままの翔助が瞬きすらしない直立不動でいる。

きつと、弁慶もこんな風に矢が刺さつて死んだのだらうと思わせる見事な大往生。

この通りを通りすぎる人々は、そんな大往生に目を当てられなかった。

翔助の耳には、カイリの言葉が永遠と鳴り響く。

「うん、居るよ」

エンドレステープのように、耳から離れず、繰り返される。

.....

春の日差しが差す廊下を、補習を受けたユキハが歩く。

廊下の窓には桜の木々が見え、窓から見える桜を彼女は見つめる。

「綺麗……」

そう呟く、彼女の背後から……。

ササッ！

まるで、ネズミが走るような不気味な物音が。

「！？」

その音に気付いたユキハは、振り返る。

すると……。

ササッ！！

妙な異音が、廊下に響いた。

.....

最近、めっきり出番がない葉月が私服で喫茶・奈良の通りを歩く。

どうやら、春の陽気で街を気持ち良く散歩していたようだ。

そんな気分良く散歩している途中……。

「ん？」

たまたま喫茶・奈良の前に、目をやると大往生中の翔助の姿が。

「はっ！？」

思わず、彼女は翔助の元へ駆ける。

なにやっとなるんだ、と思った葉月が翔助の肩を掴み揺らす。

「なに、やってんの！？こんなところで、固まっちゃって！..」
揺らしながら、そう言う。

しかし、翔助は固まったままで反応なし。
よほどショックが強かったらしい。

そんな彼に、痺れを切らした葉月は..

「あーっ！！あんな所に、エビフライ伯爵が！！..」
と、適当な所に指を差して、適当な嘘を叫ぶ。

だが、それでも反応はしない。

「目覚ましなさいよ！！..」

いいかげんに、イラついてきた葉月が翔助の頬を叩く。
バシン！と綺麗な音がなり、頬が赤くなった。

しかし、それでも反応はなし。

そして..

「あつ、あと三十分で水曜どうでしょう！？が始まる..」

葉月は、適当な嘘を言った。
すると..

「えっ！？..」

翔助は意識を取り戻した。

そんな微妙な嘘で、失恋のショックから意識を取り戻す。

葉月は翔助の単純ぶりに、苦笑した。

ちなみに、この日は月曜だ。

.....

多摩はまだ学校に居て、ユキハを探してはいた。

だが、彼は校内の駐輪所に戻り、C B 7 5 0のシートに座り、タバコを吸う。

やはり、ユキハは帰ったのだらうと思い、また後日に逢いに行こう

と考えていた。
そんな時…。

ガシャン！！

ガラスが割れる音が。

多摩は驚き、鳴った方に首を向ける。

すると、三階のどこかの教室の窓が割れていた。

「なんだ？」

………

窓ガラスが割れたのは、三階の物置部屋のようなだ。

ここには、調理実習で使われる調味料などが置かれている。

そして、隣はちょうど調理実習室。

そこには、誰も来ることも居ることもないはずである。

多摩は、そこへ走って向かう。

すると、妙な臭いが鼻に入る。

嗅いだ事のある臭いではあるが、なんの臭いかは、すぐ解らなかった。

鼻に手を当て、調理実習室を覗くと…。

「！」

多摩は、急激に懐かしい想いと、切なさに襲われる。

調理実習室に、彼にとって忘れられない者の後ろ姿があった。

そして、多摩は思わず、調理実習室に駆け込み、叫んだ。

「ユキハ！！」

間違いなかった。

あの黒髪と、華奢な後ろ姿は彼女しかいないと、多摩には断言でき

た。

だから、彼女を見つけた時の彼の喜びは、とてつもない物であったが…。

「…」

呼び掛けられても、その後ろ姿は反応しない。

「…！」

多摩から、喜びは消えた。

調理実習室が、妙な臭いで充満している。

そして、どこからか、プシュー！と言う音がした。

チューブから、空気がぬけるような音。

「ゴホッ！ユキハ！？」

臭いが、なんだか、理解した。

調理実習室で使われるガス管から、ガスが吹き出している。

そのことに気付いた瞬間。

彼女が振り返る。

片手に、マツチがあつた。

振り返った彼女の顔は、間違いなく、多摩が探していたユキハの顔。しかし、彼が知っている彼女の様子が違っている。

「ユキハ！お前、なにしてんだ！？」

懐かしさや再会の喜びが、この彼女の異様さに消された。

「…」

呼び掛けられても、彼女は答えない。

そして、多摩を無視して彼女はガス臭い調理実習室から出ようと歩き始める。

多摩は、あまりの異質さに恐怖した。

そして、直感で。

「ユキハじゃない…！」

直ぐ様、わかった。

同時に、これから、彼女のすることも。

「やめろ！！ユキハ！！お前、どうしたんだよ！！！」

調理実習室から出た彼女に、多摩は叫ぶ。

だが…。

ユキハは、片手にあったマッチからマッチ棒を取り出す。

「やめろおおおー！！！！」

シュボツ！

マッチが擦る音がした。

キハには、何者かが取り憑いたのを知るのは後。

……………

ブオオオオー！！！！

翔助のゼファーが、学校に向けて駆け抜ける。

いつも走る道から見える学校の位置から、モクモク…と煙が上がっていた。

彼が、ちょうど失恋で落ち込んでて葉月が現われた時…。

葉月の携帯が、友人から着信で鳴り…。

「えっ！？嘘でしょ！？」

電話に出た彼女の第一声が、それだった。

翔助は、彼女の携帯から聞こえる声を盗み聞きすると、学校の調理実習室がガス爆発したとのことだ。

「なんだと！？」

それを聞いた瞬間、直ぐ様、ゼファーの方に飛んで行く。

葉月は、携帯を片手に、ゼファーのエンジンを回す翔助を見ていた。

ゼファーのアクセルをいつもより強く握り、煙の上がる校舎を睨む。

「多摩の奴、確か、学校に…」

そう考えると、翔助の頭に嫌な想像が沸く。

.....

嫌な想像は当たった。

学校には、救急車、消防車、警察やら多くの人々が集まる。

そんな人混みの中を、ゼファーをパトカーの隣に駐輪させた翔助が突っ込む。

どけ！どきやがれ！と鬼気迫りながら、人混みを掻き分ける。

そして、掻き分けた先で、煙を上げる校舎が目に入った。

さらに、燃え盛る校舎の屋上に誰かが居るのにも気付く。

「校舎にいる生徒、教師達は、誰も近くに居なかったためか、幸い無傷でしたが、約二名がまだ校舎に居る模様……」

と脇から、警察か救急隊の報告が聞こえる。

どうやら、多摩や例のユキハの姿は見えない。

翔助の頭に、大量の血液が流れる。

腕の血管が激しく脈打つ。

（マークジャックとか言う野郎が、仲間が居るみたいなこと言ってたよな……）

こんな状況になるのは、侵略者と頭に浮かび、マークジャックの仲間の宇宙人の仕業だと、一気に頭の中で推理を組み立てた。

怒りで、頭がいつもより精確に確実に回る。

「どけ……！」

現場を封鎖する警官を払い除け、翔助が学校に向かって走る。

こんな無差別的なやり方が、たまらなく頭に來た。

次々に来る警官の手を避け、校舎に入る。

そして、誰も居なくなつた瞬間。

カッ！！

大きな光が放たれた。

.....

第18話「季節は巡る」

.....

「俺、参上...」

ゼイファーマンは、屋上に辿り着いた。
ガス爆発の名残で、少し煙たい。

煙が包む、屋上には人の影が二つ。

制服が焦げ、重度ではないが火傷を負い気を失った多摩と、何者かに意識を支配され、片手に調理実習室にあったと思われる出刃包丁を持つ冬海カイリ。

ゼイファーマンには、エイミネーターと与島の件があったので、彼女が宇宙人に憑かれているのがわかる。

「てめー、俺にとっては未知である女の体使って、随分、でっかい花火上げてくれたじゃねえか...」

出刃包丁を持つ彼女に指を差し、ゼイファーマンが言う。

「貴様が、貴様が、マークジャックをやったのか？」

ユキハの声ではなく、どすの低い声だった。

出刃包丁を口元にやり、彼女は舌で刃を舐める。

即座に、ゼイファーマンは答える。

「だったら、なんだ？」

「死んでもらう」

刃を、ゼイファーマンに向け睨む。

刃は、煙が漂う青空を映す。

以下、ゼイファーマンの心の声。

あー、畜生ー。多摩の奴を、人質に捕られた...。あの服の焦げっぷりは、ヤバい...。早く、助けねえと...。

宇宙人の野郎、あのマブい子に憑きやがってー。確か、多摩が探してた子か？あいつも、ついてねえなあー。

ていうか、殴れねえじゃねえかよー。

しかも、刃物持ち出しやがってー。

あー、カイリさんにフラれたばっかなのにー。

そうこう考えているうちに、憑かれた彼女は包丁を振りかぶり、ゼイファーマンに向かってきた。

「考える暇すらないか…」

とりあえず、ゼイファーマンは後ろに跳んで、彼女と距離を取る。うかつに、手は出せない。

しかし、彼女の手には凶器がある限り、避けねばならない。

だが避け続ければ、火傷を負った多摩の命は…。

一番理想的なのは、彼女の体から、憑いた宇宙人が離れ、ぶちのめし、多摩と彼女を救出…、出来れば良いのだが、宇宙人は彼女から出る様子はない。

何故なら、彼女の体に居る限り、攻撃は来ないし、刃物があれば、十分、ゼイファーマンにも致命を与えられる。

そう考えているから、宇宙人は出てくることはない。

人質は、多摩とユキハの二人。

どうにかして、ユキハの体から、奴を解き放たねば…。

向かってくる刃を避けながら、ゼイファーマンは、自分のすべきことを見いだした。

しかし、考えるのは簡単だが、実行とは難しいことである。

ブンー！と鳴りながら、彼女の右手の包丁が、ゼイファーマンの首に向かって、振られる。

その瞬間。

ガシっ！と、その右腕を、ゼイファーマンは右手でキャッチした。

「よし、掴んだ！」

「くっ！」

彼女の顔が歪む。

あとは、このまま、右手から包丁を離すようにすれば…。

そう思いながら、ゼイファーマンは彼女の手にある包丁を奪おうと左手を動かした時。

「いつ、痛いっ…！やめてよ…！」

宇宙人に憑かれたはずの彼女が、急に女の子らしいを仕草をした。
「っ！」

女性慣れしていない翔助の意識が、これに反応し、思わず手を離す。しかし、それは宇宙人が油断させるために作った演技でしかない。

「馬鹿が！」

偽りの仕草をやめた宇宙人の意識は彼女の体を操り、包丁をゼイファーマンに再び向けた。

「しまった！」

思わず、手を離してしまったことを後悔させる間もなく、ゼイファーマンに刃が飛ぶ。

包丁は、ゼイファーマンの腹部に刺さろうとした時…。

グサッ！

「うぐっ！」

ゼイファーマンは、包丁を右手で受けとめた。

包丁は、手相に合うように刺さった。

手のひらから、甲まで貫き、血が流れ、刃にも血がタラタラと流れる。

苦痛の表情を浮かべながら、ゼイファーマンは、これに驚いた彼女の包丁を持つ手を、左手で叩く。

これにより、彼女は包丁から、やっと手を離す。

しかし、ゼイファーマンの右手には包丁が突き刺さったまま。

「くっ！」

武器であった包丁を失った彼女は、悔しそうな顔をした。

「てめえええー」

ゼイファーマンを苦痛の声を挑発に換え、右手から包丁を抜き取り、血が滲む足元に捨てた。

血が流れ続ける右手で、拳を作った。

「ふん…」

彼女は目を閉じた。
すると…。

ギョーン！

「！？」

猛獣のような顔をし、マークジャックに似た姿をした宇宙人の姿が、目の前に現れた。

どうやら、やっと本当の姿を曝したようだ。

宇宙人の姿が出たと同時に、とり憑かれていたユキハが気を失いながら、その場に倒れた。

それを見て、ゼイファーマンの心の中で、保ち続けていたなにかが、はち切れそうになった。

「私の名は、トリーツク。マークジャックと同じく地球人を捕獲に…」

宇宙人が、名乗っている途中…。

「二つ、答える…」

ゼイファーマンは、言葉を挟んだ。

ボタボタと滴れていた血が、いつのまにか止まっていた。

「なんで、この学校を爆破した…」

俯いているせいか、ゼイファーマンの目が見えない。

トリーツクは、鼻で笑いつつ…。

「理由なんかいる？強いて言えば、マークジャックをやった貴様をおびき寄せるため。まあ、貴様を処刑するための撒き餌かな」

軽い感じで言う。

「なんで、その子に憑いた？」

ゼイファーマンは、血が止まった右手で、倒れ込むユキハに指を差す。

それに対し、またトーリックは鼻で笑う。

「だから、理由なんかいるのー？」

バコッ！！

そう答えた瞬間、トーリックの顔面に、ゼイファーマンの右拳がめり込む。

顔面が、バキバキと音を上げ、クレーターのように凹んだ。

ゼイファーマンの中で、切れてはならないものが、プチキレた。

「他人巻き込んで、調子こいてんじゃねえやあぁ！！！！ドクサレ！！！！」

もう一撃、二撃、三撃と、何度もトーリックの顔面、手足に拳を入れる。

「関係ねえ奴を利用して、生き物として恥ずかしくねえのかぁああ！！？爆破で、人死ぬんだぞ！！解んねえのか！！？ああ！！？てめええは、死んだあと体調崩せ！！！！」

最後に、思いつきり、トーリックの股間を蹴り上げた。

すでに、気絶したトーリックは屋上で泡を吹いて倒れる。

そんな奴の前に立ち、ゼイファーマンはトーリックに向かい…。

「てめええええみたいな、無関係な奴を巻き込む奴は、反吐が出んだよ！！！！」

と叫び散らす。

煙は、いつのまにか消えた。

……………

あれから、数日…。

春休み中に起きた、あの出来事は、天声学園の生徒たちに恐怖を与えた。

春休みが終わった今、爆破した校舎で修復のため工事が始まっていた。

恐怖はあるが、それでも、生徒達は学校へ通う。

何故なら、皆この学校に愛着があるからだ。

それは、翔助とて同じ。

なんだかんだで、彼も学校へ通う。

春休み明け、初日の朝の通学路を彼は歩く。

右手には、あの時の深い傷が残る。

この傷で、まともにゼファアのアクセルは回せなかった。

「……！」

ふと、通学路の途中の喫茶店に目をやると……。

ガラスの向こうに、楽しそうに笑う春野カイリの姿が見えた。

誰かと話しているようだが、翔助はそれ以上、彼女の姿を見なかった。

何故なら、心の傷が疼くから。

更に、通学の途中、妙に背の高いリーゼントと、それに似合わない黒髪の美少女が仲良く話ながら、通学路を歩く。

あれは、多摩とユキハの二人だ。

どうやら、あの事件後、二人にあつた壁は消えたようだ。

どんな会話をして、数年の壁を越えたのか翔助は気になったが、それ以上に、二人は一線越えちまったのかが、気になって仕方なかった。

そんな二人の間に入らぬよう、翔助はわざと歩を遅くして道を歩く。

「ん？」

目線を変えれば、今度は与島歩の通学姿が見えた。

そういえば、今だにエイミネーターは憑いているのだろうか？

しかし、憑いているのか解らないということは、彼はイジメられていないと言うことでもある。

「たまには、話し掛けるよ……」

与島の中に居るか解らないエイミネーターに対して、小声で呟く。

そんな彼の少し後ろを、クラス委員の風奈が歩いていた。

あのタクシー以来、彼女は車がトラウマになってしまったらしい。

その代わりに、彼女はバイクに興味始めていた。

そんな彼女の目の前に、翔助の背中が見えた。

「あつ、あのバカリーゼント……」

風奈は、ため息を吐く。

そういえば、あいつゼファア乗ってたな……と彼女は思った。

翔助は、玄関に到着した。

下駄箱で、靴を履き替えていると……。

「おっはよー!!!」

ドン!と、威勢よく背中を葉月に叩かれた。

「っ!」

それに驚いた翔助は、怪我した右手を下駄箱に激突させた。

「ぎゃあああああー!!!!!!」

始業を伝えるチャイムより、その苦痛の叫びは響いた。

こうして、ゼイファーマンこと、名塚翔助の新学期が始まって行く。

あの右手の傷が薄まった頃、翔助は、ゼファアのタンデムに葉月を乗せ、湘南の海へ向かってアクセルを捻った。

.....

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3861b/>

ゼイファーマン

2010年10月25日19時43分発行